

# 土 淨

號 月 七

昭和十年七月廿日第三種郵便物認可（第報一四二日發行）  
昭和十八年六月廿日印刷納本・昭和十八年七月二日發行

第九卷 第七號



安西覺承著

新刊 法然上人の和歌

B6版六十四頁 定價五十錢 送料四錢

まことにわが祖法然上人は天成の歌人であられた。そのお歌はどこまでも歌としての美しさに輝く歌である。調子のよさ、格律の正しさ、技法の緻さ——實に立派な歌品であつて、優にこれを當時の一流歌人の勞作に比することができよう。(著者の言葉)

法の歌によく上人御遺徳の結晶をみる。

み詠こそ上人のお姿であり、み教へてあ

る。上人の御作として確實な和歌全部(二十首)について一々懇切な語意、通釋、感想をのべ、金玉の詞花がそのまゝ、讀者のものとなる定本である。

發行所

法然上人鑽仰會

東京市芝區芝公園明照會館  
振替東京八二一八七番

陸海軍病院 慰問「淨土」應募のお勧め

◇全國陸海軍病院の全部へ毎月新刊の信仰雜誌「淨土」を贈呈して白衣の勇士に法味を捧げ、大變喜ばれてゐます。

◇一口一圓五十錢の淨財を御喜捨下さい。それによつて一年間毎月雜誌が病院へ参ります。

◇個人でも、團體でも、亦金高が一口以下でも結構です。振つてこの聖き運動に隨喜して下さい。

◇御送金は淨土宗務所事務變部宛に！領收の證には宗報及び「淨土」の誌上に御芳名を掲載します。

◇多數の陸海軍大臣の感謝狀、勇士からの謝狀がこの意義ある運動の全貌を語つてゐます。

申込所

淨土宗務所

東京市芝區芝公園明照會館  
振替東京一五一一一番

淨土七月號 目次

表紙・目次カット……………中島保

山本元帥を憶ふ……………里見達雄(二)

最近の感動……………生田花世(三)

如露如電……………吉田絃二郎(四)

白衣の療養所の法縁……………西村辰藏(四)

お盆と施餓鬼……………(六)

とし子を授かる……………岡本一平(六)

燦たる英靈(詩)……………白鳥省吾(四)

ブルマの話……………北林透馬(八)

自肅心得歩行と登山……………出口林次郎(六)

無敵海軍の水兵魂……………大坪元治(五)

信仰相談……………(三)

歌壇……………岩野喜久代選(二) 漫畫貯め抜くぞ 漫畫協團(元)  
俳壇……………太田耳動子選(五) 修行と信仰……………(三)

宗教漫筆 とんちん物語……………天真生(四)

法説解 至誠は言葉によらず……………中村辨康(五)

編輯 移記……………(四)

法然上人御法語  
阿彌陀佛は不取正覺  
の詞を成就して、現に  
かのくにましませ  
ば、さだめていのちを  
はらん時には來迎し給  
はんずらん。



# 山本元帥を憶ふ

法然上人讃仰會々長 里見達雄

山本元帥が太洋の彼方から帝都に無言の凱旋をせられたのは五月二十三日で英靈は水交社に安置され、六月一日から御通夜の儀が執り行はれた。其の第一夜の一日は内閣及各省の高官に依つて営まれたが、私は端らずも内閣の審査會委員の一人として特に許されて席に列し感懷殊に切なるものがあつた。



山本元帥の肖像

たる武勳は未だまで戦史を飾り烈々たる敢闘の精神は長く史上に輝くものである。皇國の興廢をその双肩に擔ひ、無敵帝國海軍を率ひて出動されて以來、最前戦で壯烈なる戦死を遂げらるまで數々の大戦果によつて國民の精神をいやが上にも奮起せしめられた。

元帥は明治十七年四月に長岡市で高野貞吉氏の六男として生れられ、小學校、中學校を通じて常に優等の成績であつた。しかし中學校に進まれる頃には高野家も山本家も共にとかく不如意勝なことが多くあり、元帥を學校に入學させるについても資力に窮した位であつた。従つて元帥の勉學時代は決して樂なものではなく、よく困窮に耐へねばならぬ境遇であつた。元帥はわづか一疊しかない狭い粗末な勉強部屋で、味噌をなめ苦學を續けられたと云ふ。だが元帥のがんなばり屋の氣質はその時分からよく現れてゐたし、更に一層磨きがかけられた。朝は水をかぶつて薄暗いうちから新聞をやり、また夜は専心勉強に打ち込んで行かれた。家は狭いし勉強してゐると大人の雑談がどうしても聞えてきて讀書の邪魔になつた。そこで机の上に兩肘をたて人差し指に耳にかつて勉強をし、眠氣がさしてくる

# 本光

山本元帥

と多でも着物を一枚々々脱いで、それで睡魔とたたかはれた。また元帥は幼い時分から負け嫌ひであつた。

た。それで剣道も達者であつた。當時の剣道は好んで長刀を用ひるの風があつたが、元帥は逆に短剣を好んで使はれた。それは短剣が敵の懷ろに飛び込んで刺す武器であるので、短剣の方が敵の手中に踏みこんで斬る勇氣を養ふためによいといふのであつた。

元帥の初陣は日本海々戦であつた。「日進」艦上で戦傷を負つたとき、その傷口を押へた白布には出陣を祝ふ母堂の歌

君のため國のためにはつくせかし散りてもかをるもののふの花が嚴父の筆で記されてゐた。この御両親の餞が戦場の元帥の心中にいつも保存されてゐた。今次の出陣に際しても

大君の御楯とたゞにおもふ身は名をものいおも思はざらなむと残して散つて逝かれたのである。

元帥の胸中は早くから米國擊滅の一本槍であつた。上海事變から間のない昭和十年に、「自分は技術部長航空本部としてひたすら對米作戰の下に飛行機、爆彈の製造をやつてゐた。たま／＼上海事變

が勃發して對米作戰の小手調べをやつたやうなものだ」と語られてゐる。また、「日米開戦に至らば我が目ざすところ素よりグロム、比律賓にあらず、將又布哇、桑港にあらず、實に華府街頭白聖館との盟ならざるべからず」との決意を述べられたと傳へられてゐる。本年正月には「今年こそは私の死に年だといふ氣がする」と手紙に認めてあつたといふ。まさに元帥は深く期するところがあつたに相違ない。それにまた遺族に對して

明治天皇の御製

いかならむときにあふとも人はみな誠の道をふめとをしへよを謹書して送られてゐた。この謹書が最前線から御家族の手許に届いてからいくばくもなくして元帥戦死の報が傳へられたといふ。元帥としてこれ以上立派な遺品はない筈である。

戦争は申すまでもなく、成るとか成らぬとかいふ問題ではない。又食ふか食はれるかといふ言葉もあり得ない。今や次々に決戦が繰り返されていて、この決戦はいつも必ず成るのでなくてはならず、敵を食ふものでなくてはならぬ。一つの決戦は一度しかなく、これには斷固勝たねばならない。われわれ一億はますます奮起し、あらゆる戦域を、あらゆる物資を決戦に集中し、そして元帥の英靈に續いて突撃してゆかなければならぬ。生死俱にわづらひ無きは浄土宗徒の心情へである。この信念に住し今こそ卒先垂範、眞に身を挺して國の實を擧げなければならぬ。(文責在記者)

如<sup>によ</sup>露<sup>ろ</sup>如<sup>によ</sup>電<sup>でん</sup>

## 吉 田 絃 二 郎

ことしはむ藏野には例年よりは小鳥が多いやうにおもはれる。五月の三日に庭の樺に三光鳥を聴いたのをはじめとして、郭公、杜鵑、筒鳥をしばしば聴く。四十雀は群をなして数日つゞいて來た。雨が多く、ひいやりとした日が多いせいかも知れない。

終日家に引きこもつてゐる身には、四季をりをりの變化といふやうなものが、人事以上に強くひびいて來る。

庭の隅のかたくりの花を見ては春を知り、絲杉の下  
の紫蘭を見ては初夏を感じ、楓葉のかげに來鳴く鶇や  
青鴉を聴いては秋も老いゆくを知るといふやうに、家  
に閉ぢこもつてゐてもしみじみと移りゆく時の流れに  
つれて急いでゐる自分の生活といふものを感じる。

いつの間にか家を出ることの億劫さを知るやうにな

つた。手足の不自由といふことが原因でもあらうが、  
このごろはなかなか旅にも出て見たいとは思はなく  
つた。

わたくしの兄を失つて以來ほとんど四十年の間門を  
出でなかつた母の心を思ひ出すことがある。

今から二十年も前のことである。鴻巣に近い村に友  
人を訪ねて行つたことがあつた。その時わたくしは、  
友人の父が二十年の間一歩も門を出でず、覺めては讀  
書し、疲れては眠つて、遂には疊の下から竹の子が疊  
を破つて出て來るやうになり、屋根は朽ちて雨が洩る  
やうになつても繕ふことをせず、棲みなしてゐるのを  
見たことがあつた。友人の父は明治の初めころ西洋に  
遊び、政黨人として重きをした人であつただけに、  
考へさせられること一層深いものがあつた。





詩仙堂に引きこもつて、つひに瀬見の小川を渡るところをしながら石川丈山のことを思ふ。大阪の陣の先駆けて首二級を獲た勇士は、軍令に背くといふ廉で黜けられたので、つひに武門を捨てた、三十三歳の若りである。しかし丈山には一人の母があつた。貧しい丈山としては心ならずも淺野長晟に仕へて孝養をつとめなければならなかつた。十三年にして母を見送るや、かれは致仕して叡山の麓一乗寺村に入つてしまつた。

手足の不自由になるにつれて引きこもりがちな生活を餘儀なくされるやうになれば、自然昔の世捨人たちのことを想ふやうになる。

しかし世捨人の生活といふものはわたくしたちが想像してゐるよりも忙しいものであつたかも知れない。生きてゐる間に、一筋に自分の仕事に精進したいために、世を避けたのであつて、實は一層痛切に骨身を削りつづけたのであらう。

精舎に世を避けた人は、念々後生の一大事を身に刻み、骨に鰹り込むために世捨人になつてゐる筈で、かれには一刻の心の休みも怠惰もあつてはならない。在

家には休み日もあり、休息もある。しかし世捨人には半日半夜の懈怠もあつてはならない。かれは一呼吸の間に迫つてゐる生死の關頭に立つてゐるからである。

わたくしのやうなもの生活にもそれ相應の楽しみはある。朝の一時間、二時間の短い時間は殊にありがたい時間である。この時間だけはほとんど人に妨げられることもなく、佛前に香を焚き、花を替へ、茶を點て、供へることもできる。朝の庭は靜かである。小鳥も鳴いてゐる。この一日わづかな尊い時間を恵まれてゐるかぎりわたくしは幸福である。

いつか細井照道師に案内されて鹿ヶ谷の法然院にお詣りしたをりの印象はいつまでも忘れることはできないであらう。折からの小雨に濡れた苔の路を踏んで、塵一つ残さぬ精舎に入つて、御佛を拜んだをりのすがすがしい氣持ちは千萬言の説教にもまさつたものであつた。

精舎とはよくも名づけたものである。佛の教を説くことも大事であるが、それよりも一層大切なことは精舎の清淨さ、尊さ、幽玄さを保つことである。宗教は



精神である。しかし形に象徵せらるゝ精神の力を忘れ  
てはならぬ。

朝々のわたくしたちの生活にも宗教がある。宗教の  
形がある。庭を掃き浄めること、花を生けること、香  
を焚くこと、茶を點てること、孤坐靜思すること、朝  
朝の尊い宗教である。宗教的形である。

京の街を歩いてゐて不圖托鉢の人に邂逅ふことがあ  
る。あの僧形を拜むだけでも、どれほどありがたい宗  
教的感激を與へられるか知れない。

客を待つために門前を淨め、花を生けるのも、托鉢  
の心である。人間は生きてゐるかぎり、人の托鉢を受  
けるとともに、自分自身も亦人に對して托鉢の役目を  
果してゐなければならぬ。

人に善果を與へようなどと考へてゐる間はかへつ  
て、人に何の力をも惠むことはできない。

若い托鉢僧たちは説教してはいけない。黙々とし  
て、念々生死の一大事を思ひつゝ、御佛を拜みつゝ、  
秋風に吹かれて京の街を歩けばいい。その黙々たる托  
鉢の姿こそさながらの生佛である。托鉢の姿を拜む巷  
の人に千萬無量の善果を結ばしめ、無上の結縁を惠

む。

正しく生き、靜かに生きる者の生活は黙々と托鉢す  
る人の生活である、一人の正成の生活は幾千萬の人の  
心を動かしてゐる。精舎に隠れたる一人の聖僧の生活  
は幾代の人の心を光被する。

世の中があわたゞしくなればなるほど、一面に於い  
て人は靜かに思ふところがなければならぬ。眞に強く  
なるためには、何としても先づ三世を達觀する底の心  
のたしなみを養はなければならぬ。

このごろ或る若い人と語つたことがあつた。

「わたしは今二十三です。死は恐ろしい」と青年は言  
つた。青年の言葉はうなづかれる。

わたくしはかつて七十幾歳の老人の死を見た。老人  
も亦死を恐れてゐた。

死を恐るゝのは人情である。しかし人は死を恐れな  
くなるのも眞實である。

誰れでも死を宣告された刹那、胸に應ふるものを感じ  
るであらう。しかし次ぎの刹那、慇懃として死に面  
する底の人もあり得る。信仰に生ける人、悟りを見出



した人の死である。

朝起きて、夜寝に就くまでの一日の恩寵を靜かに考へ、味ふことができる人は、たゞ一日生き延び得たことに對しても眞に生き甲斐を感じ、生まれ來たことをありがたく思ふであらう。一日の生存にしてさうでありとすれば、二十三年の生涯は決して短いとはいへない。まして七十餘歳の生涯をやである。永劫の時から見れば二十三年も七十餘年も如露如電である。時間長の短はない。

わたくしたちはたゞ一日生き得たことを此の上もなくありがたひなことと思はなければならぬ。

今日一日ありがたく生きさしていたゞいて靜かに寝に就くとおもへば、いひやうもなく尊い今日一日のわが人生である。今宵このまゝに死ぬるとしてもありがたい。

もしまた明日も一日生きて庭を淨め、靜かに香を焚き、佛を念じ、親しい人のために茶を點じ、いさゝかにも隣人をよろこばすために生きるかと思へばこの上もない楽しみである。

増谷 文雄 著 (B 6 版二四〇頁)

行 誡 上 人

定價一圓五十錢

送料十二錢

稀代の善知識の全傳成る、一讀興味盡きざるもの

中村 辨康 著 (B 6 版二四〇頁)

日常勤行式講讀

定價一圓五十錢

送料十二錢

毎日お勤めするお經文の懇切なる解説、信仰の入門書

山本 幹夫 著 (A 5 版一六二頁)

法然佛教とわが國體思想

定價二圓二十錢 送料十五錢

神國日本の教澤として法然佛教を史的に解明す

中里 介山 著 (三六版二五〇頁)

法 然 上 人 傳

定價六十錢

送料八錢

文豪の手になる上人傳記の權威勅修御傳の通俗化

發行所 法然上人鑽仰會

東京市芝區芝公園明照會館  
振替東京八二一八七番



# ビ ル マ の 話 はなし

## (三)

陸軍報道班員

北  
林  
透  
馬

メクロン河を越へて、國境のピサンロックからビルマに入るのに、まづ二週間はかゝるものと計算して、僕等はカンチャナブリの街でその準備をした。

何しろ全くの人跡未踏と言つたジャングルと山嶽地帯を二週間歩くのだから、準備と言ふのは主として食料の事なのだが、さて、食料も二週間となると相當のものである。僕等、本當に報道の仕事に従事する者は、記事を書くもの、記録を取るもの、寫眞、ニュース・カメラマン、新聞社の特派員などで、人数は知れたものだが、矢張り場合によつては敵に遭遇すれば戦闘もしなければならぬから、戦闘員も居る。武器もあり、彈藥もある。それら全部の二週間の食料は、米だけで

も相當だし、副食物も少量では無い。それを運ばせる爲に牛を買ふことにしたが、さて牛を連れて行くとすると、牛を扱ふ爲に現地の人、タイ人、ビルマ人を雇はなければならぬ。これは道案内をさせる爲にも必要だし、これは道案内をさせる爲にも必要だし、數人雇ふ事にしたが、これを雇ふと此者たちの食料も二週間分である。また手を増さなければならぬ。ところが牛だつて、喰べずには動かないし、ジャングルのなかに牛の食物はないのだから、牛の飼葉を二週間と云ふことになる。これがまた見上げるやうな大變な量で、牛に喰はせる飼葉と運ぶ爲にもまた新しく牛が必要になり、その新しく買った牛の爲にまたビルマ人が必要になり、そのビルマ人もまた飯を食ふ。と言ふやうなわけ

で、鼠算的に團體は膨脹してゆくばかりである。牛は荷物を運搬させるだけ運搬させ、用が無くなつたら、これを殺してビフテキにして喰べてしまはう、と言ふ心算で買ったのだが、何しろ牛肉屋の店頭にある牛肉なら買ったことはあるが、生きて角の生つてゐる奴など、誰も買つた経験のある者は無いんだから、値段の見當がつかない。

矢張り一頭二〇〇圓はするんだらう、と現地のタイ人に値段を聞くと

「戦争以來、牛の値段が急に高くなりまして」

と、ひどく言ひ難さうに言ふ。重ねて、幾らだ、と聞くと、

「一頭三〇バーツよりお安くは出来ません」

と言ふ。當時六バーツが十圓ぐらゐの割だつたから、まづ五〇圓である。

「一〇〇匁一圓の計算とすると、牛肉としたら馬鹿に安いもんだなあ」

と誰かと言つてゐたが、散々荷物を運ばせた上で、あとでビステキにしゃうと言ふんだからまあ高いとは言へない値段であらう。

が兎に角、荷物を背負つた牛がずらりとならび、タイ人とビルマ人がならび、これが僕等の一行かと思つた時には、何となく一種の感慨のやうなものがあつた事は事實である。

「スタンレー探検記」と云つた形だね」

と、これも誰かと言つて笑つたが、探検映畫を現實に見るやうな風景でもあつた。

メクロン河を越へて、いよいよジャングルに一步踏み込む。

河を越えるのにも、まる一日かゝつてしまつたが、これは牛が水を恐れて、素直に河を渡つてくれないからであつた。

渡河點は、クエヤ河とクエナイ河との合流地點にあり、つまりこの二つの河が合してメ

クロン河になつてゐるわけだが、その地點で水量の異つた二つの河が合してゐるので、水の不均から、一種の渦巻に似た複雑な水流現象が起つてをり、小舟で渡河するのだが、漕手には特別な技術が要求される。それだけでも多少は危険なのだが、何しろ船が小さい



ので牛など乗せる事が出来ず、牛は船の兩側に縛りつけて船と一緒に泳がせるのである。水際までは何とかして引張つて来るが、これを水に入れて船に縛りつけるのが容易なことで無く、何うやら縛りつけてはみても、船と一緒に泳がすのは、また大變な事である。

泳ぎ始めても、水流が複雑で、船も牛も押し流され、ぐるりと後むきにされてしまふので、一端河に入つた牛が、すぐにまた元の河岸に泳ぎ歸らうとする。もとより軽い小舟だから、二匹の牛に引張られては、小舟の方が牛に操られてしまひ、何うにもならない。

と言ふやうなわけで、僅か數頭の牛を渡すのに、まる一日かゝつてしまつたのだが、さて何うやら對岸に勢揃ひをして、夕食を食つて、いざ出發に異議を唱へだしたのが、タイ人とビルマ人たちである。

當時、即ち一月初旬には日本軍が、どしどし泰緬國境にむかつて出動を開始してゐたが、無論この行動は絶対に秘密にされて居り、ビルマ防衛軍たる英印兵が、これを知るわけは無い。また知られては大變なことになるから、この動きには慎重を期したわけであり、カンチャナブリ迄は兎も角として、以後のジャングル行軍はすべて夜行軍ときめてゐた。これは戰略上の必要と同時に、僕等自身の肉體的條件から言つても、三十三度の酷し

い暑熱のなかでは、日中の行軍は餘りに疲勞が甚だしく、日没以後の清涼な空氣のなかで行動するほうが遙かに健康にも好く、且つ能率的だ、と言ふこともあり、この夜行軍は言はば一石二鳥だつたのであるが、さてこれに頑として反對するのがビルマ人達なのである。

何う言ふわけか、と訊いてみると、結局はジャングル内の野獸に襲はれることを恐れてゐるのだ、と言ふことが解つたが、ではどんな獸があるのか、と言ふと

「この附近は世界でも有名な、野生の象の棲息する土地です。印度象で、アフリカ象よりも性質の狂暴な奴が、たくさん群棲してゐますし、その象を襲撃する虎もゐます。豹もゐます」

その虎に似た大きな目玉をぐるぐるさせて、如何にも怖ろしさに言ふ。

「成程さうかも知れないが、と言つて獸を怖れて夜行軍をやめることは出来ないから、色々とだめだめたり、脅かしたり、金をやつたりして、何うやら彼等を納得させるのにまた相

當の時間を要し、いよいよ出發、となつたのが、既に陽はとつぷり暮れた、二十二時に近い頃だつたらうか。

二十二時と言つても、二時間の時差があるから午後の八時頃のわけだが、あたりは眞暗で、空には星ばかりがチカチカ光つてゐる。

南國の夜、と言ふものの、好きさはまた格別のものである。など、空を見上げてゐると、やうやく出發を承諾した例のビルマ人達が、ごそ

ごそのひとかたまりにかたまつて、何やら始めだした。いづれも出發の準備だらうと思つてゐると、何處から集めてきたのか、枯木や枯葉を山ほど積みあげて、これに火をつけて燃すのである。

寒い時なら焚火も解るが、この南國の夜で、快的な涼しい氣候で焚火もヘンなものであり、第一これから先、國境に近づけば、敵機の哨戒を警戒しなければならず、こんなことをやらいは敵はない、と思つたので、止めさせやうとすると、

「これはおまじなひですから、是非やらせて下さい。狂獸除けのおまじなひなのです」と、焚火を取り巻いて、みんなが聲をそろえて一勢に、奇怪な叫び聲をあげる。なるほど、野獸は火を怖れるものだし、こんな奇怪な叫び聲を聞けば、大抵向うが驚いてしまつて逃出すだらうから、おまじなひとしては仲々科學的ではあるが、併しこれを毎日やられては少々困る。

いくら英印軍がぼんやりでも、國境附近には飛行機の哨戒はあり、これが毎日夕方になると大きな火が見え、それが一日毎に國境に近附いてくるとなれば、餘程の馬鹿でない限り、何かの大きな集團が國境にむかつて動いてゐることは解るだらう。そんな事から、友軍の戰略を察知されるやうな事にでもなつたらこれは大変な事である。と言ふので、このおまじなひも嚴重に禁止してしまつたので、ビルマ人たちは相當の不満もあつたらしい。

尤も、怖れてゐた野獸には、結局一度も襲はれなかつたのだから、後には彼等も別に何も言はなくなつたが、最初のうちはいろいろ

## 歌壇

岩野喜久代筆



名古屋市 鷺津 耕順

沈丁花<sup>しんてい</sup>が つつましく咲き香<sup>か</sup>の高し嫁<sup>よめ</sup>  
ぎ來<sup>き</sup>し日の亡き妻<sup>つま</sup>に似る

(評) 亡妻の追憶は沈丁花のひ

らくのを見ていよ、切である。この花のやうに、つつしみ深く、目ざましい華やかさはなかつたが、遠くからでもそれとわかるなつかしい香氣を漂<sup>はな</sup>せてゐた

京都 重松 保

大淀<sup>おほふで</sup>や彼方<sup>かなた</sup>の岸に立ちつづく煙突<sup>えんつと</sup>  
の吐<sup>は</sup>くけぶりたなびく

(評) 淀川べりに立つて彼方大

阪の方を眺めると古の詩歌にはない風景が眼前に展開してゐる。現代人士はこのやうな景觀に胸ををどらすものである。

朝鮮 關谷敏三郎

神上<sup>かみの上</sup>りますみ姿の尊<sup>たう</sup>けれ、千尋<sup>せんじん</sup>に

沈む際も笑みつつ

(評) 山口、加來、兩提督の壯

烈、沈勇、鬼神をも哭かする最後は一億國民の胸底に未だ沸沸たる感激を残してゐる

東京 上野 昌子

死の際の心澄むらん沈みゆく艦に  
いまして月を賞しぬ

大阪市 太子 亮宏

大いなる感激ありて我が胸は高鳴  
るのみぞ、何を爲すべき

兵庫療養所 前川 泰象

みいくさに捨つる生命をここに病  
み散る花見れば心痛むも

大阪 岡野 英信

夢にして病みます父の脊を擦れど  
覺むれば悲し離れる身ぞ

北海道龜田療養所 石川 章

傷つきしつはもの眠る窓の邊に咲  
きて明るし紅梅の花

北海道龜田療養所 高橋 實

霧こむる釧路の街のたそがれに霧  
笛の音のさびしくひびく

兵庫縣 水谷 良子

病みつく日煙打ち終へて蒔きし麥  
穂の出揃ふと人の來て云ふ

投稿規定 官製ハガキ一回二百以内とし

「淨土」編輯部歌壇係宛に送ること

と煩いことであつた。

二週間の豫定は、

併し見込はづれで、

實際は三週間かゝつ

てしまひ、食料難は

深刻で、最後には、

全然食はない日が幾

日か續き、牛も草か

ら落ちて死んだり、

病氣になつて捨てた

り、結局ビステキに

して腹におさめるに

は、人情が移つてし

まつて、今更殺すこ

とも出來ず、道案内

をしたビルマ人たち

に、残つた數頭はチ

ツプ代りに呉れてし

まつた。

象には出會はなか

知れない。

つたが、象の集團が行手を横切つたことはあり、直徑五〇センチあまりの大きな竹が、十本二十本かたまりになつて群生してゐるジャングルに、其處だけは立派な道路が作られてしまつたのには驚いた。僕等は戰隊部隊が一度通つた後を行つたのだから、辛うじて道らしいものは附いてゐたのだが、一群の象が自然に作つた道は、それより遙かに立派なものであつた。路には象の糞が残つてをり、直徑三〇センチほどの圓筒形を爲したその個形物は、それだけで象の大きさを示すに充分なものであり、暫く見とれてゐたほどである。

豹は夕ぐれ時に、一度見たことがある。あれが豹だとビルマ人が教へてくれたのだが、樹上から、ちつと此方を見つめてゐたので、すぐにまた樹間にかくれてしまつたが、瞬間の感じでは、全身眞黒で、眼が青く光り、大きな黒猫のやうに見えた。思つたより小さい氣がしたが、これは周囲の樹木が大きいので、その比例から来る目の錯覺であつたかも知れない。



# 最近の感動

生 田 花 世

關西、四國の旅から歸つて三日目である。今度の旅は、去年つづいた母の墓への最初の墓まゐりなのであつた。

大阪に立寄り、いつも縫物ばかりしてゐて船にも、汽車にもすぐ酔ふ妹を誘ひ出し、ともども、母の新しい墓の前に立ちたかつたので、妹が、家を出られるまで三日待つた。

この三日間に、私は大和の橿原神宮に詣で、神武天皇御陵に參拜し、住吉神社をおがみ、箕面公園を見、堺の妙國寺に、有名なソテツを見學した。

妙國寺の近くには、弟がゐて、〇〇工場にて、豆産業戦士たちの寄宿の監督をしてゐるのであつた。

豆産業戦士たちは諸地方から出て來てゐるのだが、仲よく、起居を共にし、よく働いてゐたのには感心した。

中に二人ほど、身體の加減がわるくて、やすんでゐるのが見えたので、私は慰問した。

幼い時から冷水浴で、身體をきたへた弟は、今も、その冷水浴をつづけてゐるといふ。青少年を、號令やら、親切やらで護りはげまし、少しでも、時間があくと、寄宿全體の掃除を何處でもしてゐる。『こゝが僕の家なのだから、氣に入るまで綺麗にしてゐるので』との氣だつた。私は感心した。

十數年前、不幸にして、妻とわかれた弟ではあるが、〇〇工場で、いとも、朗かに立働き、給料はそっくり、國債を買ふのにあてて、戦争のつづくかぎり、この生活態度をおしつづけるのだといつた。

母の墓にまゐるのも、戦争が終つてからにするといふ。いひ出したら、きかぬ氣の弟だから、戦争が百年つづいたら、母の墓まゐりをせずに、死ぬであらう。

私は、弟に、母への香料をつつませた。こんな次第にて、弟や、弟の監督する産業戦士たちの勤勞報

國に感心した私であつたが、弟に教へられて行つた近くの日蓮宗妙國寺のソテツの怪偉さにもつと感心した。

もはや、千年に近く、寺内に蟠居するこの大ソテツは、かつては、織田信長の安土の城にうつし植ゑられたが、寺に歸りたいと夜夜、醒を發するので、信長は家臣に命じて兩斷した。ところが、上部は龍の如くうごめいたので、信長も怖しくなり、カブトをぬいで、妙國寺へとかへしてくれた。

誰だつて、聞いておどろき、見ておどろく大ソテツである。

だが、この大ソテツの靈力にもまさるところの人間の靈力が、この妙國寺に在り、期せずして、その靈跡にふれた私の感動は深く、且つ、大きい。

明治元年、世は、明治新帝の御即位第一年であつた。

鳥羽伏見の戦にやぶれた徳川慶喜は、江戸へにげかへつた。そこで、堺、大阪、兵庫（三ヶ所は幕府直轄）の警備者がなくなつたので、薩摩と、長門と、土佐がそれをする事となり、堺は、土佐の侍が警備についた。

朝廷と、幕府とのこの状態を好機なりと考へて、日本侵入の野望をもつイギリス、フランス、アメリカの軍艦十數隻は、横須賀から、大阪灣へと回航した。いづれも大砲を艦上に備へて、いざといへば、事をかまへて、打ち込まうといふ氣構へであつた。

住吉をへて、フランスの海軍將兵が、堺へと、陸上から入つて來

た。土佐の侍はこれを許可なくして入るべからずと追ひかへした。翌日、海上から、數十名のフランス水兵が、ボートに乗つて、堺濱におしよせた。海岸警備の土佐の侍は、これを波打際に迎へて、許可なくして、上陸すべからずと遮つた。それでも、フランス水兵は、口々に、ワイワイ云ひながら、無理矢理に上つて來る。上陸させまいとする土佐の侍はフランスの水兵ともみあつた。そのうちに、土佐の侍のもつ警備の旗をふんだくつて、一人の水兵がボートの方に逃げた。こちらはおつかけて行く、そのうち、むかふがピストルを出した。土佐の侍が、一刀ひき抜きざま斬り倒した。そこらは修羅場となつた。フランス水兵は十六人血だらけとなり虫の息だ。即死もあつた。これにおそれて、むかふは、ボートにみな飛びのり、雲を霞と逃げ去つた。

土佐の侍は、立派に、み國の海岸を護つた。ところが、フランス軍艦のりこみのフランス將官は苦情を申し込み、五ヶ條の提議を日本が承知しなければ、大砲を放つと宣言した。

朝廷では、御前會議が開かれ、多くの人々が、會議して、その結果、徳川慶喜追討のため、官軍の大部分が、關東へ對つてゐる留守の事として、こゝは、事穩便にといふ事に廟議が決し、土佐の山口侯のフランス軍艦への陳謝と、賠償金と、土佐の侍二十名の死罪とで、先方をなだめる事となつた。

土佐の侍は口惜しかつた。が、山内藩公から、フランスのため

# 燦たる英靈

—— 由本元帥を悼む ——

白鳥省吾

或る日

雪深き長岡に赴きて

ゆくりなくも山本元帥の母校の

坂の上校の演壇に立ちたることあり。

そのころ次官たりしことも

坂の上校の誇なりき。

或る日

春浅き加治川の堤を過ぎて

見事なる兩岸の櫻樹に

花咲くころの美觀を心に描きたりき。

いま山本元帥の逸話に

その川に舟を浮べて

快走の舳に逆立ちしたりといふことに

新しき懷しさを感ず。

にさうするのではない。日本國のためにさうするのだ。可哀さうだが、命をくれるやうにと説得されて、これに従ひつひに、場所は堺の妙國寺の本堂の前にて切腹といふ事となつた。

一人、一人、十一人目まで、何れもものの美事に割腹し、フランス將官をハッタとにらみつけ、『み國に仇するわるものども奴！おのれ、死しても七度生れ變り、汝等にこの神國はす土たりとも占領させぬぞ！』と念じて落命した。

割腹の一人一人の眼力のものすごさに、フランス將官は、次第々々におそろしくなり、つひに居られなくなつて、コンコンと退場しもはや十二人目は切腹しなくていいといふ事となり、十二人の侍は、口惜しく、舌をかみ切つて死をはかつた。

十二人の黒髪は、一つ一つの「もとどり」となつて、三寶の上に、今も若やかな色をありし日の如く匂はしてゐる。

私は懷然として、この七十數年前の壯烈な護國の靈に相對した。

瞑目すると、侍の聲をきく思ひがした。

『永久に、日本を外人のために汚されぬぞ』

と叫ぶかのやうであり、これらの人々は、生れかはり、日清、日露、又、この度の大東亞戰爭にも參加して、兵として働いてゐるやうな氣がした。

こんな、公的な、忠烈な怨靈を私はいまだ知らなかつた。

かかるはげしい犠牲によつて、この日本が護られて來たのである。

元帥こそは日本武士道の精華

北越の偉人

艱苦練成して燦然と磨ける人格

つねに情にあつく

師を敬ひ

知友を愛し

部下の戦死の報に涙潜然たる提督

寛嚴よろしきを得たる慈父

温容の夫

つねに郷土を愛し

黙々として秋霜のうちに春風の思ひなり

ああ偉人を生める郷土は燦然と輝く

いまや長岡は

東郷元帥を生める鹿兒島と雙壁なり

反歌

越路なる悠久山に鳴く郭公

ことしの夏のなんぞ悲しき

ことは知らなかつた

南無阿彌陀佛

み佛も、神明も、この土佐の侍の忠死を無駄にはなさらないと思ふ。——かう考へたのである。かうした事も、大東亞戦争の序曲の一つであつた。何でも、この戦争に勝たねばならぬ。

陸海軍病院慰問「浄土」寄附者芳名 (略敬稱) 〇十圓 佐賀縣三養基郡島栖町 〇小澤繁 〇十圓 川崎市北加瀬壽福寺 伊藤法龍 〇十圓 京都市東山區林下町 信重院 〇十圓 大阪府天王寺區堀越町六六 井上淺太郎 〇五圓 大阪府西成區玉田本通一ノ八 吉川ひろ 〇四圓 五十錢 敦賀市神樂町善妙寺 吉川汀巖 〇三圓 東京市本郷區淺嘉町九八 林清二 〇三圓 兵庫縣加東郡中東條村碩安寺 山口諦忍 〇三圓 京都府綴喜郡普賢寺村極樂寺 深尾乘賢 〇一圓 五十錢 鹿兒島縣内之浦町玄忠寺 音琴信純 〇一圓 五十錢 東京市荏原區二葉町三ノ五〇七 上島喜一郎 〇一圓 五十錢 横濱市鶴見區駒岡町 西田金藏 〇一圓 五十錢 京都府綴喜郡普賢寺村多々羅 山本倉造 〇一圓 五十錢 大阪府豐能郡小曾根村長糸 渡木繁 〇一圓 五十錢 奈良縣生駒郡北倭村高山 上島憲恒 〇一圓 五十錢 福岡市鹿原一番町二七 福田倉一 〇一圓 五十錢 熱海市下多賀一四八四 坂口きよ子 〇一圓 五十錢 奈良縣高田町 専修院 〇一圓 五十錢 滋賀縣甲賀郡三雲村西照寺 源信彦 〇一圓 五十錢 神戸市神戶區中山手七ノ一四四四 豊永志津子 〇一圓 五十錢 東京市品川區北品川六ノ三九二 森谷きく 〇一圓 五十錢 東京市赤坂區田町三ノ十一 鈴木ふみ 〇一圓 五十錢 東京市麻布區廣尾町六十三 森谷武三郎 〇五十錢 岐阜縣稻葉郡鏡島村 松井敬導

訂正：前號本欄に石上皆應とあつたのは大谷諦忍の誤りでした。

# お盆と施餓鬼

こう云ふ話がある。釋尊がある年の夏安居を蘇羅婆國で御修行なされた。ところが折悪しく蘇羅婆國は飢饉に見舞はれてゐた。何分にも幾百人にのぼる佛弟子を九十日の間も供養するので、施主の長者たちも仕舞には力盡きて飯食供養を中絶してしまつた。すると目連が釋尊の前に出て得意の神通力で一同を他國に移し飢渴を助けたいがある。でせうかと願ひ出た。しかし釋尊は末世になつて神通力のない人達が飢饉に遇うたら如何にして之を遣はれるか、神通力を濫用してはならんと説めて許さなかつた。爲に釋尊は數日の間絶食

される始末であつた。佛弟子の一人がこれをみて大いに歎き自分の三衣を賣却し、僅か一杯の飯を購ひ得て早速に釋尊に差上げた。すると釋尊は飯を手にしてこう弟



子に訓諭され

た。「出家の身に尊き三衣を以て求め得たこの飯食は、汝を養育してくれた父母の外にこれを受ける資格は無い。速かにこれを持參して汝の父母に供養せよ」

その弟子は止むなく家に行つて、これ亦飢饉に類した母親を訪ね供養した。平素信仰等に縁のなかつた母親も釋尊の廣大な慈愛に感激して遂に佛弟子になつたといふのである。

佛教で四恩といふのは、天地の恩、國の恩、父母の恩及び衆生の恩のことをいふ。そして知恩報徳の道を教ふのが佛法である以上、四恩を完うする者こそ佛弟子である。目連は釋尊から「父母をして信仰に入らしむるは第一の孝道なり」と教へられるにつけ氣になるのは修行のために國を出て幾星霜の間一度も父母に音信すらしなかつたことである。さうだ世尊の御弟子となつたわが悦びを父母に告げ、父母にも俱に永却の生命を欣

ばせやう」と思ひ立ち矢も楯も耐らないで、頭陀袋一つに身も輕く郷里を訪れた。孝行をしたい時には親はなしで、目連が家の前に立つた時は、父母共にこの世になく門戸も空しく荒れ果てゐた。悔恨悲歎の涙に暮れた目連は己が神通力を以て、父母は如何にしておいでになるか觀察してみた。父は幸ひ天上界に生れてゐたが、母は墮貧邪見の罪で餓鬼道にゐた。咽喉は絲よりも細く腹だけは太鼓のやうにふくらんで、全身が骨と皮ばかりに瘦せ衰へてゐた。目連は非常に驚き白飯を淨器に盛つて母に供養した。母は喜んでこれを食べやうと、口までもつてくると忽ち火炎になつて食べやうもない。目連は泣いて走せ歸り釋尊にこうお願いした。「どうぞ世尊よ、母の苦患を救ふ

て下さい。いな餓鬼道一切の苦を救ふべき道を教へて下さい。」

釋尊は目連に徐ろに説かれた。

「目連よ汝の母の業障は餘り深いのに汝修道の功はまだ浅い。所詮汝一人の力を以て如何ともするこ

とは出来ない。幸に我に方便がある。来る七月十五日は佛歡喜の日である。この日に山海百味の飯食を淨器に盛り、離欲無我の聖者たる大家が一心に協力して拔苦與

樂の同向をすれば、その功德は廣大無限にして餓鬼道の苦痛如何に重くとも立所に救はれるであらう。これを盂蘭盆の法といふのである」

こうして始つた盂蘭盆會が今は魂まつり、精靈まつりとなつて、年に一度祖先の諸精靈をおまつりし、われわれがこうして今日あることを感謝するのである。この感

謝の氣持から盆踊りその他お盆の行事があるのである。おがらを焚いて祖先をお迎えし、一家を擧げて喜ぶお盆は忠孝一體のわが國にふさはしく楽しい行事である。

次にお施餓鬼であるが、これは阿難の致請によるものである。阿難は釋尊の弟子十哲の内でも多聞第一といはれた人である。この阿難が青年時代のこと或る森林中で修行をしてゐたら、そこに一人の婆羅門が現れて

「まことに氣の毒であるが汝には死相が出てゐる。折角偉い聖者になる積りで佛道修行に精進してゐても、確かに汝の命は三日の中に盡きるのであらう」

と告げた。阿難は未だ修行中なのに、ここで死んでは永劫悟ることが出来なくならうと氣も顛倒せんばかりに驚き、早速釋尊の所に

行つてこれを訴へ、その救済を願つた。

すると釋尊は阿難の心情を憐れ、徐ろに教へて云く。

「阿難よ、人の壽命は總べて各自に宿業の定まるところで、佛の力

と雖もこれを自由に變更することは出来ないものである。ただ大因縁によりて自ら新しき生命を創り出す外はない。夫れには善い方便を教へて遣らう。先づ大慈悲心を起して三界に充滿せる有緣無緣一切の餓鬼に、淨飯食を施して彼等が不斷の苦患を救うてやるがよい。その大功徳力によつてこそ反

つて汝に新しき生命が與へられ、

延命轉壽の結果も現はれることであらう。阿難はここで愁眉を開いて希望の喜びにもへたち、早速に大眾を請じて大施餓鬼會を修し、

わずか三日に迫つてゐた壽命を轉じて八十歳に近い長壽を得た。



こうして今に至るまで施餓鬼會は有緣無緣三界萬靈、法界平等の追善供養を行ひ、わが身一生を反省し近くはわが家を思ひ、進んでは國家を思つての大報恩行事として行はれてゐるのである。

御先祖に打ち死にさせて高枕われわれは決してかゝる忘恩の輩になつてはならぬのである。現に北に南に幾多忠勇の將兵が大君のためお國のために血を以て御奉公申し上げてゐるのである。大報恩行事がお盆なら今年のお盆こそ英靈の心を心として、われわれは尊き血に報ひなければならぬ。

## とし子を授かる (一)

## — 再婚の心用意 —

## 岡 本 一 平

ささなみはわれとさわ立つつもりであるが見渡せば風の仕業である。池の月おのれ在るさまに似たれど仰げば元かげは空にある。知られずして動かし来る大なる力、われ等にもこのこと多し。

おもへば四年以前、この家は朽るにまかせた醜の宿であつた。あるじは歎きに閉された鰥であつた。今日や、葦きに改めともかくも人の棲家らしくなつた。厨に煙を上ぐる主婦もあり、ふたりのをさな子の聲は軒に響く、昔ての廢残のあるじも勇んで世務奉公の諸役に就いた。勝ち抜かん國の決意を身にしめて、力の限りはと朝夕働んでゐる。變つたものだ。

あるじはこれを自分で氣を取直したせいでと一應は考へる。しかし物事が深くも大きく顧みられる折々は、とてもそんなことからではないと氣付かされる。

深くも大きく感じられて來るといふのは、わが民族の持つ本然の力のことである。培ふべきには千年の歳のやうに静もり潜まつて培ひ、咲くべきには間髪を容れず、萬葉の櫻となつて世界を空に咲き満ちる。廻らさざる智なく、行はれざる能なし。しかもこの中に在て揺がぬ軸心は常恒の座に金輪際微動だもしない。こんな美妙にして強靱な民族性がまたとあらふか。たま／＼民族に消耗の起る場合がある。すると忽ち補給してなほ増越す力がある。

頭を擡げる。この一事、殊にわが民族が最古の歴史を保持しつゝいつも春とこしなへの若人である民族たる證左を示す。

この力、わたくしに觸れて蘇れりとあらはにいふのもおほけない氣がする。さりとしてそれに觸れられずして微力わたくし如きが更生し得る道理もない。假りに一步を譲り、中老の齡にして、再び結婚の試験に、踏み出した冒險を、自らの勇決に歸するとするも、五十六歳にして一子、次いで五十七歳にしてまた一子、いはゆるとし子を擧げ得たに就ては、何といふぞ。もはや「わたくし」などいふ僭越の言を弄し得ない。年寄たちのよくいふ「子は授かりもの」といふ言葉の意味に附加へ、時局下の必要、わが民族の本然の力が、わたくし如きものゝ上をも掠めて、この二つの小さき新生命は招呼にあづかりとみるのは必ずしも不遜の心事ではあるまい。親子に加へられしこの責任と光榮、故かの子女史は嘗てうちで應召兵の御宿をしたとき下の句の

一ばん終りを「將士を預り申すぞ」と結んだ歌を詠んだ。わたくしはわが子ながらにこれをわが子のみとせず、預り申すぞと私を離して宣誓する氣持で一ばいだ。

行末のことをいふは差控へる、しかし現在のところ數へ歳三つの上の女の子はおほらかに、おしやまである。次ぎの二歳の男の子は、

上の女の子の手  
傳ひ好き

ヨイテヨ



よく肥つて、肉にいくつか括れのある腕を雞刀のやうに振り廻はす。不健康とも愚かとも見えない。ふたりの幼子から光さして家は暗き陰を失ひ、人は希望を執上げた。これを老友たちに話すと歎び且祝つて呉れたのち笑つていつた「そりや君の手柄といふよりは畑が良いからさ」と今日世上に増率したこどもの

出生を見て、もちろん當局指導の力を認めると同時に誰しもわたくしが前に述べたやうな深く大なる力を覺らぬものはあるまい。老友とてむろん感じてゐる。しかもこの諸君

の言を放つ、赤ん坊が生れたといふことは何人をも嬉々明朗の氣分にするらし。これに調子を合してわたくしも笑つて答へる「畑かね。はははは、或はそうかも知れない」

經に神變士轉といふことがある、他よりは知らず、内から囁れば將にわが家はそれほども感ぜられる改りやうであつた。そしてこゝまでに辿り來た心機と行階は必ずしも亘々たる運歩ではなかつた。世上、萬一、更生に難き人あつて多少の參考にも資せんと望まらば、車事も囁ずいささか披瀝してかたぐ萬靈への供養にすべし。いかに嘆きに陥ち、骨身くづ折れたにせよ、世を捨て身を脱れるは人間として卑怯な振舞ひである。もとより大乘の訓へには無い。人にも諭されかく自らも恥ぢて破船の槳を取直さうと決意したのが踏出しの第一歩である。一たん覺悟の志氣には生死を超へて恂ずべしと示した故かの子女史の女ながらも雄

雄しき信條が今更燄火のやうに感じられて来る。そして同じく蘇るべくんば人の中の人たるべし、世務も生活も全責任をもつて擔つてこそ試みらるべく蘇り来る新人新生命の意義はある。かくて俗中の俗に割り入らう方圖を定めたものが踏み出しの第二步である。世務や生活や、人々もすればこれを俗といふ。實は勿體ないことだ。

泥なくして蓮は咲かない、泥、取りも直さず蓮、この價值認識と價值轉換と。修業ぞこれ。探し求むるに塵のうき世のみ好箇の練成道場である。天分豊なるものを恵まれたかの子女史すらこの聖俗達とは參らなかつた。まゝ、いはゆるの世事俗情には疲らされ泣かされてゐた。纏ぐべし修業を、百尺竿頭一步を進むべし。

なにしろこの鼈の宿に鰥のおやぢではどうにもならない。蚊帳は釣り放し、中に忍び入つたたくさんの蚊は毎夜寝るおやぢを餌に初冬まで生き延びてゐる。炊いた釜は洗はずに

次々と炊くのでお焦げが半分ほど出来る。それに冷めた番茶をうちかけ澤庵の丸嚙りが菜で、腹が減つたときを期に眼をつむつて流し込む。この間は一年止むを得ぬ俗風流もこゝに至つて極めりといふべし。再婚して主婦を作ること定める。

再婚は一人では出来ない、相手があることである。しかも相手は女だから、向ふの氣持を察してのこつちの心意氣がまづ肝要である。

かういふ話を聞いた。それはある雑誌記者であつた、愛人と結婚して同棲僅か二三年のうち、その愛妻を没くした。しかもその二三年の間は記者は失業中で物質的に最も恵まれない時代であつた。彼は妻の生前妻ととき々散歩した。新婚者には楽しかるべき數刻である。妻はコーヒーが好きなので喫茶店に入りそれを飲ませる。妻は一杯を飲み干したのち、なほ一杯を欲し氣である。けれどもそれを叶へてやるだけの金が彼の懐にはいつも

無かつた。もちろん着物としては浴衣一枚買つてやれる餘裕はなかつた。

彼は職を得て再婚した。しかし彼が愛せし先妻を窮乏の中に逝かしめた遺憾は斷てない。

彼は年末に賞與を貰ふ、彼はそれで百貨店から美しい晴衣を買ふ、それを持つて亡妻の墓場に行き、彼は墓畔に穴を掘つてその晴衣を埋めてやるのであつた。この行爲は不穩當なものとして墓地の管理者から禁じられたが、彼が自室に亡妻の寫眞を飾りこれにコーヒーを二杯づつ供へる習慣は再婚の後といへども續けて止めない。氣持は自然と表に現れる後妻とて面白からう筈なく、家庭は常に風波が絶えないといふことである。私はこれを聞いてそぞろ鬱然の情を催したが、彼再婚者として爾前に解決し置くべきものを、甚だ等閑に附した責めは免れないといふ氣がした。自他のためよろしくこの問題を解決してみやう。



(答)

(山田縣・油田村・井原臥草生)  
 墓の花に限らず、凡てのものを有り難く願いて行くことは、念佛信仰の最も大切な所としてむしろ遺憾とも云ふべきものであります。阿彌陀とは「無量」と云ふことです。森羅萬象の一つ一つを通してその中に「無量」を感じ行くことは即ち「阿彌陀」を感じることであり、す。そこに感謝があり感激があります。その意味に於いて慈々信仰

(問)  
 野邊のそとる歩きに不圖見つけた墓の櫛の美しきに、何かなしに阿彌陀様のおん導きを願いたやうな氣がしました。  
 それを直ちに念佛の教の内容であると思つてもよいでせうか。

## 自然と信仰

の増上もあるわけであります。

## 無量壽とその他

(問)  
 一、無量壽とは何んなことでせうか  
 お念佛を申せば永久の命を與へて下さると申しますが、永久の命とは如何心得べきでせうか 一念にも無量壽ありとはどんなことでせうか

二、阿彌陀様とはお釋迦様の信仰内容を阿彌陀様としてお示しになつたものでないでせうか、従つて法藏菩薩はお釋迦様の御修行時代を言つたもので、お釋迦様のお悟りは即ち阿彌陀様と存じますが……

(答)

(福井縣・新保村・南谷乙吉)  
 無量壽とは讀んで字の通り「かぎりなきいのち」と云ふことですが、本當に價值のある仕事をして居る時間こそ「ほんとうのいのち」であつて、その外の時間でも働きをなさながらの休養ならば、それもや

## 當 中 村 辨 康

(質問 歡迎)

はり本當の命であります。こうした時間こそは永遠の價值であります。ですから念佛の仕事でなくてはならぬ譯であります。

また阿彌陀様は無量壽でありますから、阿彌陀様に歸命すればおのづから無量壽と合一するので、淨土の人は皆無量壽なのであります。何となれば「歸命」とは我が小生命を如來様の生命の中に歸せしめるからであります。

一念に無量壽ありとは誰が言つた言葉か知りませんが、禪宗の「信心銘」には「一念萬年」と云ふ言葉があつたと記憶して居ります。眞實の一念は萬年即ち無量壽の價值ありと云ふ意味です。單に存続する時間をいのちと考へて居る世間一般の考へは正しい生命觀ではありません。隨つて「念佛で永遠の生命が與へられる」と云ふ考へは正しくありません。自分の方へ貰ふのではなく、こちらの小



# 談相仰信

な命を大生命の中へ入れてしまふのであります。

二、お釋迦様の信仰内容の表現が阿彌陀佛であるとの考へも昔からあるにはありました。然し何もそんなことを考へる必要はないと思ひます。眞理は永遠であり且つ萬人に通ずるものです。随つてお釋迦様にのみ限る必要もないでせう。

## 精靈棚の飾りかた

(問) お盆のお精靈棚の飾りつけに一定のきまりがあるのでせうか、今度當地

に越してきてまるで今までと違ふところがあり、土地の風習によつて私もそのやうにしたいと思ひますが、若し、何か定つた飾り方でもありましたら御教示下さい、お忙しい所を恐れ入ります。

(神奈川県・中郡・寺坂心誠)

(答)

精靈棚は元來農祭から來たものですから、本當には四本の柱を建て、四方に綱を引いてそれへ色々の農産物をかけ、棚の上にはこもまたはまこもを布いてお位牌を安置して食物を供へる、そして瓜や茄子で、馬や牛などを作つて飾ります。細いことは地方々々に依つて色々な相違があるやうですが、大體は前記の農祭を中心にした魂祭と支那の中元とを一處にした日本獨特の先祖祭りであります。民族學的研究としては色々あるやうですし、土地に依る特殊なものもあるやうですが、一般の普通人の心得としてはその土地の習慣を見做ふのが一番無難であり結構だと思ひます。

## 子供の救ひと

## 信仰の生活基本

(問)

先月に子供をなくした者です。毎日子供のことはかり思出されて睡れないときもありました。御寺参りも致してお念佛も唱へますが、今まで信仰心がなかつた故、本當に阿彌陀如來様が救ふて下さるでせうかと不安に思つて居ります。私の子供はお淨土に行つて居るでせうか、また子供への供養には何が一番功德になるでせうか。またお念佛は生活の基本になつて云ひますが、何故でありませうか、お教へ下さい。

(盛岡市・志家・田村昭)

(答)

信仰を理解出来なかつた子供さんが死んだ時に、何うしたらその子供の救ひが確認せられるかと云ふことは、親心としては無理もないことで此の欄でも既に二回も出て居ることあります。

然しこの考への中には少し思ひ違ひをして居る點があります。それは子供の信仰を大人の信仰と同じ状態でなければならぬやうに考へ違ひして居ることあります。然し大人と子供とは違ひます。大人は理解力があります代りに、相當多分に疑ひの心を持つて居ります。然るに子供は理解力はないが疑ひの心も



# 談相仰信

なくまた他と比較する力もなく思つたら思つただけで誠に純であります。ですからおぼあさんなりお母さんなりがお寺やお宮につれて行つて「なむ／＼するのですよ」と教へたり、或はまだ目も見えず耳もきこへない「お七夜」の赤ちゃんでも、その子を抱いてお詣りして神前佛前にお辭儀をする時、自分がお辭儀をするのもその赤ちゃんの代りになつてお辭儀をして居るのであつて、言はゞその拜禮は赤ちゃんの信仰なのであります。その時の心境を精細に考へて見ればそれは決してその人の信仰ではなく赤ちゃんを想像しての信仰なのであります。即ち清淨無垢の何にも考へない唯凡てを無條件でお頼みする氣持だけなのであります。その瞬間の次には再び我にかへつてその子の無事息災も祈られることでありませうが、拜禮の第一念はその赤ちゃんになり切つて居るに相違ありません。それが赤ちゃんの信仰なのであります。此の故にあ

なたの子供さんに信仰がなかつたと斷定する事は出来ません。唯だ大人のやうな功利的なもので又は理窟っぽい信仰でなかつたと云ふだけは確であります。

まして今あなたが子供さんを亡くした悲嘆の餘りにお寺参りもし御念佛をするやうにもなつた事は、むしろあなたが子供さんに信仰を教へて貰つて居る事であつて、あなたの救ひが成就する以上に、あなたの御子さんの救ひは完成され且つ増進されつゝあるのであります。言はゞ信仰の寫眞であります。あなたの信仰はあなたの子供さんの信仰増進の現實的なあらはれとして今茲に現象しつゝあるのであります。随つて子供さんへの供養としてはあなた御自身の信仰を認めることが一番根本的な供養となるものと考へます。

次に念佛が生活の基本になるかとの御質問ですが、念佛の最も重大な意義は平生にあるのであります。平生とは生活のことです。業務生活のことです。私達は兎もすれば自己本位の米英的思想になり勝のも

のですが、念佛の中の仕事として常に如來照鑑の下に日暮しさせて頂いて居るならば、自然正しさが持續されますから、よし假りにそれがうまく行かなくとも、隨犯隨懺して段々に淨化されますから、念佛は生活を清める基準になるわけであります。

此の問題に關しては委しくは「法然上人の宗教」と題して九月末には大東亞公論社から私の近著が發刊されます。日本觀、國體觀、業務觀が念佛信仰の中に明確にされ擴充されることを説いたものです。幸ひに御一讀を賜らば幸甚です。

讀者の聲 續仰會にて發行の雜誌、書籍は非常に廉價で、この時節にはまことに勿體ないことゝ存じてゐます。私如き療病中の貧しいものは無上のよろこびで御座います。しかもしみじみと滲み出る法味と眞生活への示唆がふくまれてゐて、一言一句私達の血となり肉となる思ひです。他の雜誌もありますが、到底「淨土」には及ばぬことを痛感してゐます。(福岡縣古賀町傷痍軍人療養所陣内良春)

白衣の  
體驗

## 療養所の法縁

西村 辰 藏

由衣を着て療養所に入つてから間もなく、

私は經典讀誦の練習を思ひ立つた。それといふのは私の家が淨土教の信仰で「佛說無量壽經」上下二卷「佛說觀無量壽經」一卷及び「佛說阿彌陀經」一卷の三部四卷を三部經と稱し、これを所依の經典としてゐたからである。幸に經本といふものは比較的安價なものであるから、思ひ立つと早速京都の本屋から赤表紙の折本を取り寄せた。

ところが經本を開いて、その難しさにびつくりした。阿彌陀經の方は幼い時よりの聞覚えで大體は知つておつたが他の二經は全く初

めてであり、口調も阿彌陀經の如く平易明快でないから一通りの困難さではない。毎日二頁か三頁づゝを繰返し練習することを日課として、だん／＼進んで行つた。

まことに日々忙しい生活をしてゐる時は落つて緩つくり本を読むといふ餘暇がない。まして難しい經典等の練習は容易に出来るものではないが、長期の病氣をしたお蔭で、それを根氣よく毎日の日課として續けることが出来たことは、まことに深い御縁にあづかつたるものと思ひ感謝してゐる。そして又これがために如何に病を忘れ難念を拂つて療養遂行の上に大きな効果をもたらしたか計り知れない。

最初やうやくのことで佛說無量壽經の卷上

のみを仕上げて、父の命日に初めてこれを佛前に讀誦したときの感激は今も尙覺えてゐる。かくて療養生活中に二部三卷の練習を終了したもの、これらを流暢に讀誦するまでには仲々の修業を要するものである。特に佛說無量壽經の卷下に出てゐる三毒段、五惡段と稱する部分は最も難所とされてゐる。

全快して就職致してから毎夕佛前の讀誦動行を日課として爾來怠つたことはない。大抵一週に一卷を讀誦し四回をもつて三部四卷を終ることゝしてゐるが、その日の都合によつて一卷を適宜のところで打切り、餘りを翌日に頂くこともある。佛前におひかりを上げ、香をたき、讀經する——この日課がすまなければ安易な境地になれぬのが私の氣持である。

先にも申したやうに私は佛說阿彌陀經には幼い頃から深い縁があつた。只今ではこのお經は十分暗誦してゐるから本を見るよりも空で上げる方が樂である。急げば四分位で讀むことも出来るわけである。これは私の幼い時

分、私の祖父の命日に坊さんが参られて、この阿彌陀經を讀まれたのと、亡くなつた私の姉が毎日の勤行にこれを上げてゐたのを聞覺えに覺えてゐたからである。姉は私と十違ひで私が小學校一年生頃のことであるから十七八であつたわけで、變體假名の打つてある和紙の折本の阿彌陀經を上手に上げてゐた。私はその傍に聞くともなく坐つてゐた。母は信仰的に嚴しい人であつて日々の勤行には必ず佛前にお参りすることを要した。それで仕方なくお参りしたわけであるが、その間が實に退屈で長く思へたものである。

時々正信偈を上げることあつたが、この正信偈は阿彌陀經よりも時間が少し長くなるので、それがまた嫌だつた。それでお勤めが始まるときには、その冒頭の文句——「佛說阿彌陀經」か「歸命無量壽如來」か——に氣をもんだものである。姉は大ていの場合阿彌陀經を上げ、母は阿彌陀經が讀めないのでも、おもに正信偈を上げた。したがつて母の勤行よりも姉の勤行を歓迎したものだ。又母

は時に嘆佛偈や三誓偈だけを上げることがあつた。これは大へん短くて時間がかゝらないので好きであつた。

勤行が終ると佛飯を下げる。これを盆にのせて台所へ持つて行くのが私の役目であつた。白い蓮の蕾に擬して盛り上げたお佛飯は全部で五つある。これをそのまゝ戸棚へなほすこともあり、お櫃の中へあけておくこともある。そして翌朝御飯のときに皆で分けて頂く習慣になつてゐた。小さいのが私の分、それから父が一つ母が一つ残りの二つを姉が頂くことになつてゐた。私はお佛飯を茶碗に入れて青味がかつた出ばなのお茶をかけて頂くのが好きで、「お下り」といふものに一種崇高な氣持を抱いてゐたのである。母はお佛飯を頂く食事には絶體に魚氣のものを禁じてゐたやうだ。

祖先の命日には皆で精進をした。月の七日が祖母のお逮夜で十三日が祖父のお逮夜で七日を「お婆の日」、十三日を「お爺の日」と、私はいつてゐた。この日には母は朝から佛壇

を清め、花をかね、鐵瓶にお湯をたぎらせて、坊さんをお待ちした。坊さんは阿彌陀經を上げお茶をすゝりながらやさしい法話をして歸るのだつた。この日は絶對の肉なしデーで、お菜に一匹の雜魚さへ使はないことになつてゐた。

私は幼時こゝろいつた信仰環境に大きくなつた。はかりなくも病にかゝり、これが亦機縁となつて、經文讀誦の喜びを味ふことが出来た。勿論經文だけが讀めても、經文の大意を知ることは容易ではない。又訓讀や口語譯本によつて經文表面の意味を諒解しても、よく多面多彩の構成を把握し深遠な哲理の眞髓に味することは亦甚だ至難のことかと思ふ。けれども朝な夕な至心にいとまされる讀誦勤行が如何に宗教情操を深め、信仰を培養するかは今更申すまでもないことと確信してゐる。今後はいよいよ至心に讀誦を勵み、これに隨順し信頼してもつて信仰の喜びに生きたく、私は思ふ。(傷痍軍人大阪療養所にて)



# 自 肅 心 得 歩 行 と 登 山

その道徳と遭難防止

厚生省鍛錬課

出口 林 次 郎

ない。しかし徒歩旅行といつても歩きたい時に勝手に歩けばよいといふのでは少しも訓練にはならぬ。たとへ一人で歩くにしても歩行道徳がある。又明瞭な目的をつくつて實施するのではなくては役に立たない。

次にいさゝか歩行者の心得と登山の遭難防止について要點を記すことにする。

## 歩行者の心得

皇軍の勇士は山を越へ野を越へ歩一步とつき進む。武器彈藥と褌袷被服と一切のものを身につけて疲れを知らぬのは、討たずば止まぬの精神によるものであるが、矢張り健脚がものをいふのである。われわれとても平常から努めて脚を丈夫にし、銃後も亦健脚を誇りとしなくてはならない。それに歩くことは老若男女を問はず、體位向上に心身鍛錬に最も適した運動である。近頃、健脚は國力、先づ歩けの運動が旺なわけもこのために外なら

遊山氣分の排撃——徒歩旅行は遊山ではないのである。訓練に華美な服裝はいらぬこと、輕佻浮薄の言動は一切慎む。さもなくば自分の爲にならぬばかりか、淳朴な土地の美風まで傷けることになつて甚だ他人迷惑なことである。従つて遊山氣分を絶對排撃しな

くてはならぬ。なるべく集團訓練を主として鍛錬的でありたいものである。

自然を冒瀆する勿れ——自然を愛し、自然に感謝する心のないものは先づないであらう

が、たまに花を折る、木の皮を剥ぐ、草をたく、高山植物を持歸る、小鳥を見たとすぐ石を投げる、池があれば石を投げ込む等々の人をみるのは云へ知れぬ淋しさと惡寒を感ずる。かゝることは現代人の恥である。一木一草たりとも濫りに採取してはならない。

樹木、岩石等に記念の文字を書き散らすことは止めてもらひたい。名前まで記してよくも教養のなさを廣告したものである。

過つてでも、苦心と汗のしみ込んだ、田、畠、山林を荒してはならぬ。

紙屑や食物の空殻の散らかしてある位汚いものはない。不用になつたら家に持ち歸るなり、一定の場所で適當に處分するなり、跡は必ず綺麗に清掃することである。

火の用心を嚴重に——一本のマツチ、煙草の吸殻、焚火の残火から大事が起ることはよく知られてゐて、尙未だこれが根絶しない。こんなものと油斷したり馬鹿にするところから大事が起るのである。

神社、佛閣に敬虔であれ——神社、佛閣、天然記念物に對しては尊崇の念を以て、決して汚損等の不道德行爲のないやうに、たとへ路傍の石地蔵、一基の塔に對しても崇敬の念を寄せたいものである。

道標を大切に——道標は先人の恩恵である。破損してゐたら修理して欲しい。道標が歪んでゐたら後から来るものに何んな不測の災害を與へるやうになるかも知れない、若しそれ萬一にも道標を傷ける者があつたとしたらこれ以上醜い姿はなく、社會人たるの資格のない輩である。

歩行者は禮儀を守れ——土地の人に對して禮儀を正しくする。傍若無人な振舞ひや喧嘩な言動は誰がみても不愉快である。地方の人



が汗を流して働いてゐたら「今日は！」と挨拶する位の禮儀を忘れてはならぬ。

行指れ會ふ同好者にもお互に親しみのある

挨拶を交し不遜な言動のないやうにする。團體に参加したならば先づ時間を嚴守し、規則を守り指導者の言に従ひ、すべて共同總親和を圖るやう努力する。

乗車道徳、守れ——歩行者が列車や電車を利用するのであるから座席を譲つて自分は立つことが本當なのである。この氣持さへあれば見苦しいことはなくなる。

その他列車内で他人の迷惑を考へなくてはならぬ。列車に乗ると不思議に不作法になる人があるが、困つたものである。列車に乗れば、一層禮儀正しくお互ひに氣をつけ合ふのが普通である。一人の亂雑と勝手氣まゝは他の全部の人が迷惑するのである。

### 登山者の心得

分相願のプランを立てること——「山は怖ろしいもの」といふ頭で、周到な準備と研究を行ひ、しかも細心で大胆なことが登山する者に必要な資格である。それを「登山ぐらひ」と輕視する登山者自身の放漫と不注意か

ら大低の遭難がおこるのである。ところで最初は自分の體力をよく考へ自分に適當な山を選んで始める。物には順序があり、決して無理をせぬことが大切である。

低い山から高い山へ——これが登山の法則である。この法則を無視して一足飛びに高山をねらふ者があつたら、遭難しないのが不思議だと云ひたい。目的地を定めるには豫定日数、時間、徒歩行程等を自分の體力と相談して無理のないのが第一條件である。長い山岳旅行や難しい山に向ふには、一應健康診断を受け、また出發前にはよく足慣らしをする。

コースの研究が大切——目的地が定つたらコースの研究である。先づ地圖の上にコースを赤く線で引く。案内書なりその方面の精通者について行經、準備、注意事項等につき充分調査し、ぬかりのない計畫をたてる。

案内と天候——案内の山は必ず熟練した經驗に富む案内人を雇ふ。案内人に無理を云つてはならぬ。登山、旅行は天候が最も重大な條件であるから、登山前にその地方の天

候を研究しておく。

用具と心の整備——装備の不十分は登山を不愉快にするし、また危険にする。装備といつても服装や用具ばかりでなく、心の整備が大切である。

食糧を十分に用意し、必ず自分で携帯する登山團體に加入すべし——組織的な統制のある團體に入つてをれば、遭難は絶無といつていい。これは指導と訓練の賜である。現在一年の登山者の内で、九割位が山岳團體に加入してゐない術の登山家であつて、この人達が遭難事故を起したり、登山道徳を破つたりするのである。

その他注意すべきこと——山で競争しないこと、山では山の魂を求めれば十分である登山者としての名譽のために、自分の屬する會のためばかりでなく、山仲間全體のための名譽を守ること。

登山旅行は必ず早發、早着がよい。夜行列車はなるべく避けること。野營の場合は日没二、三時間前に野營地を決定すること。

團體登山は多人數にならぬやうにし、五六人から十人位までで紐をつくり、その一團毎に經驗者をリーダーとして統制を保つこと。

登山の遭難の主なる原因は、山上の暴風雨、濃霧、險惡なる山稜、斷崖の通過、雪溪傳ひ、溪流の徒渉などが主である。山上の暴風雨は雨と風と寒氣とが一度に襲來するし、また雷雨も急激に溫度を降下せしめる。天候の惡化をみた時は必ず出發を見合はせるのが安全である。途中で險惡な天候に遭遇したら、無理をしないで、近くの小屋に避難する。小屋がない場合は雨具、防寒具をしつかり身につけて、あせらず進路を誤らぬやうにする。輕率な行動は吳々も禁物である。また道を失つた時は潔よくもと來た道へ引返して再出發するがよい。佛聖芭蕉の「行脚の掟」はいろいろな意味で今讀み返しても教へられるところが多い。その末尾に「夕を思ひ旦を思ふべし。日暮の行脚といふ事は好まざる事なり。人に勞をかく事勿れ、層々すれば躓んぜらるるの意を思ふべし、はた料食たりとも好むべからず」と旅には周到なる立案と準備が要るもので、忍耐努力心の養成を論じてゐる。

(ンキヨウ)

(1)



(2)



(3)



(4)



(5)



(6)



(7)



借して  
あげよう



貯金に手をつけた  
くないから借り  
たい？  
よい！  
心掛けだ



近頃貯蓄に熱心な作



「お父さんお遣い」  
親父安心して  
「あいよ！」



こんなまづさうなもの  
を喰べる位なら  
貯金した方が  
よつぽど  
いゝわ





# 無敵の水兵魂

大 坪 元 治

君のため何かおしまん若櫻

散つてかひある命なりせば

九軍神や第二次特別攻撃隊の諸勇士は申すまでもなく、皇軍の誰もがこの歌と同じ覚悟で日夜聖戦完遂に奮闘してゐるのである。實は私もこの名譽ある皇軍の一人として先般お召しがあり、横須賀に馳けつけたのであつた。そこにはすでに噂々とした顔をして各地から集つた戦友が私を待つてゐた。水兵とい

ふものはこうして一つ所に集つてみると、實に顔見知りが多いものである。そここでヤ・アヤアとばかりにすぐ昔の苦樂を共にした懐しい仲柄になつてしまつた。その中でも特に親しい者もある。こうした仲間が十數名づゝ一ヶ班として編成される。

ある一日の事だつた。激しい教練の済んだあと、遙に霞む房總の山々を眺め乍ら私たち十・四・五名の一團が、思ひ出深い海岸に腰を下

して四方山話に華を咲かせたことがある。その時誰かと、

「何うだい、この中で子供を持たぬ奴があるかい」

といつた。すると俺は二人だ、俺は四人だと、少いもので一人、多いものは七人の子供があるといふわけで、子供のない者は一人もゐなかつた。さつき質問した仲間が大いにわが意を得たといふ顔つきで、次にこういふ提案をした。

「俺たちは艦にのつて出掛けたら、再び本土を踏めるとは思はれない。何うだいこの内で一人残るか、二人残るか知らないが、若し残つた者があつたら、その者がわれ／＼の子供の世話を引き受ける事にしないか」

「それがいい。お互が戦友の子供の世話を引き受けることにすれば子供も幸せだ」

早速一同が同意してしまつた。確かにこれは重大事に違ひないのだが、こう約束した時の私達の氣持は坦々たるものであつた。しかし少なくとも私はこの約束は今以て必ず履

行するつもりである。こうして我々の話は自づと愉快だった現役當時の思ひ出話に移つて行つた。私達が海兵團に入つたのは大正十五年十二月のことで、當時まだ震災で壊れた横須賀が使へないため舞臺に入つた。その頃の海軍はワシントン會議で主力艦のトン數を押へられてゐたので、敵に勝つには何うしても人的要素を以てする外に途がないと決意してゐた。だから訓練は實に烈しかった。入團早々に吹雪の日本海でカッター訓練をやりながら、われわれも訓練で敵に勝つのだといふ氣魄に燃えてゐたことをよく憶へてゐる。

新兵教育は僅か六ヶ月に過ぎないが、この間にみづちり水兵魂をたたき込まれるのである。私達の教班長は小野崎一等兵曹であつた。どの教班長でもさうであるが、教班長の新兵の取扱振りは全く至れり盡せりで兄弟としても及ばぬものがある。教班長は自ら新兵の模範となつて「自分のやる通りにやれ」と云ふ者が多い。若し新兵が少しでも顔色を曇らせた心配顔でもすると、早速教班長が

「何が心配なのか」「家庭に何かあつたのではないか」等々尋ねるので、新兵たるものうっかり暗い顔一つ出来ぬ位である。即ち水兵の公私に亘る一切の世話をし、同時に水兵魂をたたき込むのが教班長なのである。

新兵教育で教はる種類と量は非常に多かつた。先づ陸上訓練では各個教練から大隊教練までがあり、次に艦内基本教育がある。大砲、水雷等の海軍常識の教育もある。又これと併行して精神教育たる座學が可成り重要視されてゐる。座學とは學課のことで、板間の上に一同が座つて講義を受けるから座學といふ。ある日のこと外は吹雪だつたので午後も座學といふことがあつた。その日は當時の主力艦陸奥、長門、伊勢、日向、山城、扶桑、金剛、比叡、霧島、榛名の名を教へられる事に成つたが、私たちの班に本間といつて、素朴な山育ちの男があつた。その本間が何うしても主力艦十艘の名が憶へられないのであつた。小野崎教班長が實に根氣よく何度も繰り返しては教へるのだが、本間は何うしても間

違つてしまふ。本間の困惑し切つた顔つきがおかしいので私達は間違ふ度に笑つてしまふ。本間は又戦友に笑はれて尙のことドギマギして間違ふといふ始末であつた。遂に教班長は本間にこう云つた。

「貴様は今朝顔を洗はなかつたらう。だから頭がはつきりしないのだ。顔を洗つてこい」

本間は妙な顔して、  
「今朝顔を洗ひました」  
と答へた。

「嘘だらう、いゝから今一度洗つてこい」  
いくら洗つたと答へても、重ねて洗へと云はれて、怪訝に思ひながらも本間はもう一度顔を洗ふため部屋を出た。長い廊下にとゴト靴音を響かせながら、やがて石段を下りて洗面所に入つたのだらう、靴音も向ふの棟の中に消えてしまつた。その時突然、雷のやうな教班長の思ひ切り大きな聲が私達の頭上に落ちてきた。

「馬鹿もの！」  
私達は餘りに突然どなられたので驚いてし

まつた。一しきり吹きつける吹雪の音のみ聞えて一瞬室内はシーンとしてしまつた。

「貴様たちは一體何んと考へてゐるのか。人間には夫れ夫れ皆特徴があるのだ。お前たちは有難いことに普通の頭腦を持つてゐて、しかも學校まで卒へてゐる。だから主力艦の各位は簡単に憶へられるのだ。當り前の事である。ところが本間は山奥にのんびり育つた自然兒なのだ。恐らく海だつて一度も見たことがなかつたらう。本人は眞剣になつて一心に憶へようとしてゐるのだが、それでゐて尙憶へられぬのは致し方がない。その代り力仕事になつたらお前達は本間に適ふまい。人間努力して出来ないことなら止むを得ない。それを貴様たちのやうに他人ごとに見てゐては戦友として友情がなさすぎる。ここで試験してゐるわけでないのだから、間違へたら側で小聲なりと教へてやつたら何うだ。本間のため

に心配してやるのが友情なのに、それを反つて面白さうに笑ふとは何ごとか。お互は同じ釜の飯を食つてゐるばかりでなく、大洋の荒

波の中で甲板の上に血を流し合ふ戦友なのである。それがこんな有様で立派な御奉公が出来ると思ふか。貴様等は何んと情ないやつなのか……」教班長は私達を叱りながら泣いてゐた。私達は襟元に水をかけられたやうに感じ一瞬われに返つた。教班長の流す涙で清められた思ひであつた。

やがて本間は何も知らずに戻つてきた。しかしその時には教班長の顔には先程の怒りの跡がなくなつてゐた。いつものやうに明朗な微笑さへ浮べて、座學を續けて行つた。

主力艦の劣勢を訓練でおぎなつて敵に勝つといふのが、月月火木金金の猛訓練の始まりなのである。昭和二年五月には加藤寛治司令長官統率の下に第二期行動が開始されてゐた。丁度この時私達新兵の六ヶ月の海兵團生活が終つて艦隊に配屬されることゝなつた。この訓練に間に合つたのである。私達は揃つて横須賀にきた。そして乗船する軍艦も決つて、私は一第巡洋艦に當時最新鋭の乗組を命

ぜられた。私は今でもその時の嬉しさ、初めて仰いだ眞紅の軍艦旗に、堂々たる海軍の偉容に心から感激したことをはつきりと憶へてゐる。

或る日の午後、ある特務士官が私達新兵を後甲板に集めてこゝ質問した。

「甲板の掃除をやかましく云ふのは何んの爲か、誰か知つてゐる者はないか」

リノリウム甲板を毎朝雑布でふき、毎週一度は石鹼で洗ふことを知つてゐても、何故かと問はれてすぐ答へたものはない。すると士官は、「先づ第一の理由は軍艦が陛下の御體であるからである。従つていつも塵一つないやうにしなければいけない。その次にはこの甲板は我々の最後の御奉公の場所であるといふことである。甲板はわれ／＼の血が流れる所であり、われ／＼はここで死ぬのである。死場所を常に清めておかななくてはならぬことは云ふまでもない」と教へてくれた。艦隊はやがて戦按訓練開始となつた。〇〇で燃料を積んで一路南方に向つた。眞夏の艦

内は塙塙のやうに暑かつた。臨戦準備となる  
と一切の窓が閉ぢられ、煙草の火一つが忽せ  
に出来なくなる。日が没しても艦内は仲々冷  
へないし、冷へかゝつた時分には夜が明けて  
また炎熱にやけることになる。ハンモックは  
使用出来ぬので夜は毛布一枚である。入浴は  
風呂呂で、上り湯に洗面器一杯の生水がわた  
り、この一杯で顔を洗ひ、身體をあびる。演  
習中は落水艦や飛行機の襲撃の連続で猛訓練  
に次ぐ猛訓練であつた。彼の有名な悲壯極る  
美保ヶ關事件は此の間の出来事である。

やがて十月には特別大演習の火蓋が切つて  
落された。

畏れ多くも 大元帥陛下には陸奥に御搭乗  
になつて、親しく演習を御統監遊ばされた。  
この時初めて太平洋上に天皇旗が翻つたの  
である。鐵旗を仰ぎ見た將兵一同は皇恩の有  
難さに感泣した。志氣はいやが上にもあがつ  
た。假想敵國撃破の大演習は三晝夜半に互つ  
て続けられ、折からの波浪は御召艦の艦橋に  
まであがつた位であつた。われわれは帽子を

脱ぎ向ふ餘巻で頭張つた。

大演習がいよいよ終らんとした直前のこと  
私達と同じ艦の水兵が急性盲腸炎にかかつ  
た。二十四時間以内には手術をしなくては危険  
であるといふことになつた。一水兵たりとも  
陛下の部下であり、御櫓の前で死なすべき兵  
である。そこでこの巡洋艦だけが全速で横須  
賀に歸れといふ特別の命令が發せられた。全  
速で歸れば間に合ふか  
らである。艦長以下一  
同は時計と睨めつこ  
で、まんじりともせず  
機關の音に耳を傾けて  
ゐた。診察室、病室の  
前には心配さうな將兵  
の顔がみられた。  
漸く艦が觀音崎の鼻  
を廻り巨港へ繫留せん  
とする頃、そこには高  
速艇が待つてゐて出迎  
へてくれた。高速艇は

## 修行と信仰

艦と併行しながら病兵を移乗させ、手ぐすね  
引いて待つてゐる横須賀の病院へ運んで行つ  
た。こうしてその水兵は手術後の経過もよく  
全快したのであつた。かくて大演習は終つ  
た。私達は間もなく執り行はせられる大觀艦  
式のため、演習の疲れは何處へやら心から晴  
々しい氣持で準備を急いだのであつた。  
(筆者は元海軍省海軍館圖書室勤務)

昔の丁稚奉公でも「水酌み三  
年」といつて 初めの三年は本  
職のことは何一つ教へてもらへ  
ず水ばかり酌んでゐるといふの  
である。  
今では年期奉公がなくなつ  
て學校教育が全盛である。そ  
して椅子に腰かけてあれもこれ  
も一通りのことを、しかも描ひ  
も描つて上滑りばかりを授つ  
てこれで一人前と思ふやうに  
なつた所に時代の缺陷があつた

と云はれてゐる。近頃鍊成とい  
ひ椅子でなく墨に臨つて學ぶ座  
學の多いのはこの缺點を補はん  
とするためである。  
何も判らぬくせに知つてゐる  
つもりの者が多いので浮華とな  
り輕佻となる。自分の腕に力の  
ないことを解せずして不平をい  
ふ所に不良が生じ 法樂を求め  
ずして享樂に溺れる所に墮落が  
生れる。一生をかけての修行は  
自づと信仰と同じ途となる。信  
仰を求めて人生を終りたいもの  
である。(神奈川縣、本間生)

筆 漫 教 宗

とんちん

天 眞 文



物語

ノ ン 坊 畫

豚珍は、或るお寺の片隅で孤々の聲を擧げました。

文明開化の恩澤が未だ普及せられなかつた故ですか、無妻の僧侶の方がとかく道徳堅固と思はれ勝ちだつたでせうか、來客ともなるとあれ豚珍のオシメが出てゐる、あれ豚珍のかつこは早く片付けよと何の因果か折角立派な長男に生れ乍ら、かなり片身のせまい、そして窮屈な境遇の中に育つて來ました。

けれど、乞食の子供も三年経てば三ツになる、豚珍も人並に小學校に入學する時が來ました。

彼は、生れて初めて穿く珍しい袴の片方に兩足をつッ込んで、悦んで小學校の門をくぐりました。

先生が「あゝ皆さん!! 皆さんの楽しいお家、綺麗なお家を繪に書いて見せて下さいね」と云ひました。

豚珍は餘念なく一所懸命書きました。書いたはよいが、先生が驚きました。

曲つたお家の外に澤山の積木みたいのと、棒が書き並べて有りました。

「豚珍さん!! 之なんですか?」

「ハイ!! 塔婆とお墓です!!」

「ヒエツ!!」と先生は目を廻すばかりです。

豚珍は小學校へ入つてお友達が殖えた事を深く悦びました。そして一緒に無心に仲善く遊びもし勉強もしました。

けれど、お寺から通つてゐる子は豚珍丈けだつたのでせうか、珍らしがられて、どうかすると豚珍を捕へては君お經が出来る? やつてよ!!とせがまれるのです。

性來、罪の無い豚珍、眞面目な顔で、教はりもしないお經を聲高らかに唱ひ出しました。ミダシンデキ、ニヨーコンセン……とウロ覚えの節まで付けて。

之がほんとの門前の小僧習はぬ經を讀むと申すのでせうか、校庭で一緒に遊んで下さる先生迄も皆と共に手を叩いてウ、マイくと悦んで呉れました。

寺のお家へ急いで歸つた豚珍は、平素目の中へ入れても痛くないと云ふ程可愛がつて呉れる老師の顔を見るや、いきなり誇り氣に賞められた事を一部始終語るのでした。

でも老師はニコリともせず、豚珍の頭を優しく撫でつゝ靜かに訓すのです。

「ワシはこの老齡まで随分お經を上げたが只人を悲しませる涙のお經ばかりであつた。

だが人様を悦ばせるお經を讀んだお前には、とてもワシは及ばないよ、豚珍は豪い、

だがな、知つても知らぬ振りして何も云はぬ人、それが本當の豪い人と云ふんだよ」と云つて暗然として熱い涙をゴクリと呑み込みました。

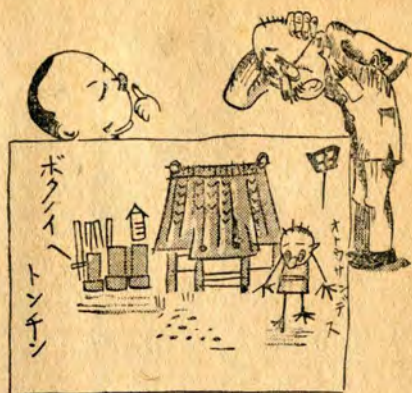
「ハ、之が能ある豚は、ハを隠す」と云ふんだなと豚珍は慌てゝ自分のお、ハに手を當てました。

其を聞き傳えてか、其から誰も豚珍に唱はせ様と云ふ人もありませんでしたし、彼も亦唱はふともしませんでした。(其の二)

### ○ とんちん物語筆者の辯

小學時代から綴方では賞められた記憶の無いと云ふ私が、どう間違つたかお褒めに任せて、本月より暫らくの間、とんちん物語を連載させて戴く事になりました。

元より豚珍漢のそゝつかしい私、御期待



に聞ひまするや否や、甚だ心もなない事と心配してゐるので有ります。が、共進の漫画家ならざる漫画家ノン坊先生の鋭筆は足らざる拙文を補ふに餘りありと信じ、ノン坊俄畫伯を唯一のたよりに其處が持前の心臓で颯爽と登場させて戴く事にしました。幸にして御愛讀賜らば筆者の光榮之に過ぐるものは無い事を申上げて初のお目見えの御挨拶と致します。

### 俳壇



太田耳動子選

初蝶の庭ひとめぐりして消えぬ  
大阪市 瀧澤 智山

栃木縣 大輪 益啓

ひさぐの雨しる麥の青さかな  
明石市 山本多可子

鳥取縣 横野 宥亭

此の春は花にもあはで餅すくひ  
兵庫傷療 關 玲子

麥の穗を飛び散らしたる狙撃かな  
青森縣 丸尾 傳山

遠く近ちと蛙なく夜の來りけり  
廣島市外 山口 勇治

篇に窓はねあけて朝餉かな  
麹町 平野雄次郎

見付坂徘徊したる櫻かな  
東京淺草 井原しま子

梅が香や湖畔の月は岡谷まで

諏訪 湖

岩國市 長岡 白朝

拔ん出て桜栢の木高し露の臺

兵庫縣 水谷 良子

木蓮の花につれなし別れ霜

東京府下 萩原 通孝

うぐひすの鳴く静けさに熱計る

東京市 山本 貞吉

目を病みてうつむきおちの花見かな

京都市 石田 和夫

ひまわりや兵の便のつゝがなき

愛媛傷療 折出 双生

ひとの手に佛陀の灯あげにけり

東京 清水金鈴子

ふくよかな若草に來て晝餉かな

北海道傷療 澤口 清

残雪の山の櫻に靜臥椅子

滋賀縣 重野ふみ子

門を出て若葉の香たよへる

富山市 新田 正治

花の下午睡の顔の明るけれ

平壤府 三浦砂千子

春月や墨繪の如き寺の屋根

室手岬町 横山 亮圓

茶摘女の留守をいくつも頼まるゝ

投稿規定

官製ハガキ一回二句以内

として一筆土に編輯部俳

壇係あてに送ること



# 至誠は言葉に左右されず

……法然上人法語解説(其十九)……

中村 辨 康

## 法 語

念佛申すべからずとおほせられ候とも、往生にこそろざしあらん人はそれにはより候まじ。念佛よく申せとおほせられ候とも、道心なからん者はそれにはより候まじ。とにかくにつけても、この度往生しなんと、人をば知らずおん身に限りては、おぼしめすべし。(津戸三郎へ使はす御返事)(拾遺和語燈錄卷中)(法語抄七七)

## 解 説

信仰は生活であつて知識ではありません。せんから、いくら他の人から兎や角言はれましても、それに依つて左右される筈はありません。然るに世間には案外うき草のやうに人の言葉に左右されて、あつちへふら／＼とつちへふら／＼ふらついて居る人があります。それは丁度病氣になつて薬やまじないに轉々として迷ひあるいて居る人があるやうに、信仰上での信仰

流浪者として結局は何にもならないのに、精神の迷路にぬきさしのならぬ有様で一生を終るひともあるやうであります。

信仰の本格的なものは「覺醒生活」であります。少くとも佛教はそれを目指して進む人とならしむるにあります。それが即ち「生死を出離する」ことであつて、この「生死を出離する」爲にこそ聖道門淨土門の別があり、その實踐門として淨土門が選ばれ、念佛が強調される譯であります。ですから念佛は「出離生死」の方法であります。實際上には念佛即生活、生活即念佛の不二一如の關係にあるのであります。しかもその生活こそ理想とするところのものでありますから、それが即ち具體的な「淨土の生活」であり「往生する淨土」であるわけであります。この故に念佛信仰の中心さへ明確になつて居れば別に問

題はないのであつて「念佛すべからず」とどんなに言はれやうとも信仰をぐらつかせる筈はありません。

然し實際問題としては中々念佛信仰の中心が明確になつて居ないのであります。何故にさうかと申しますと「存在観」が抜けないからであります。淨土を存在的に眺め、阿彌陀佛を人間のやうな個在的なものに眺めて居るからであります。無理もないことではありますが、これは一種の「執着」であつて信仰ではありません。信仰のぐらつかつのもまたこの執着なるが故であります。執着以上の高い理念にあつてその考への非なることが或る程度わかりますとそれがぐらつくことにもなるのであります。

こんな状態では駄目であります。

阿彌陀佛は無量壽であります。永遠にいきることあります。いきると云ふことは常に進化やまざることであります。同じ姿のまゝで止まつて居る筈はありません。随つて固執するところのないのが本當であります。それは進展そのものが「いきる」ことなのですからであります。固執は實に非進展であります。非進展は「死」の姿であります。死の姿は非淨土であります。非淨土はまた非阿彌陀であります。この故に固執するところに「淨土の信」はないと言

はねばなりません。

また淨土と阿彌陀佛とは一體不二であります。四十八願の全部が阿彌陀であり、四十八願の全部が淨土であります。そしてそれは「永遠に生きる」ことであり「現にいきつゝある」ことであります。随つて、眞に生きることを得たものが「往生人」である譯であります。

然るに「眞に生きる」ことは誠に難いことであります。善導大師も「往き易うして人なし」と言はれました。法然上人も

往生は世にやすけれどみな人の

まことの心なくてこそせね

と詠んで居られます。問題は至誠を以て事にあたることであります。それ故に至誠こそいひのちであります。至誠こそ眞生であります。然るに兎もすれば「我」の考へが出て来て至誠の心をかき亂してしまひます。即ち損だとか得だとかとすぐ算盤が出て来たり、從來の色々の引つかゝりに迂路つかせられたり、毀譽褒貶に左右されたりして、つい至誠を以て貫いて行く氣持がにぶつてしまふのであります。ですからその「至誠心」を常に養ふ必要があるのです。茲に常に念佛唱名がなければならぬ理由があるのであ

ります。

中には常に念佛してゐたのでは何も出来ないではないかと云つて批難する人もありますが、それは批難せんが爲の批難であつて、事實はそんなものではありません。人の心はコロコロと常に變化しつゞけてゐるが、つて居るから「ころ」と言ふのださうであります。佛教では「一人一日の中に八億四千萬の念あり」と云つて居ります。八億四千萬とは數へ切れない程に刻々に變化して居ることをたとへて言つたものでありませう。このやうに變化する心を少くとも念佛で統一して行き、念佛心の至誠でまゝとめて行くことは、それがよし斷續常なくとも積りつもつてまゝとめられて行くところに、人間生活中の眞實さを見ることが出来るのであります。

それも單なる至誠ではないのであります。天地の大生命たる無量壽に歸一信順するところの至誠であります。この至誠ある人こそ「淨土人」たる資格を有して居るのであります。一念に一度の往生があてられて居る所以もまた茲にあるのであります。

元來この法語は津戸の三郎が鎌倉幕府に念佛のことを召し問はるゝことになつたので、迂濶に返事をしてはならぬ

と思つた津戸三郎爲守は、法然上人に一書を寄せてどう言ふやうに答辨したらよいでせうか、色々と難問もあらうかと思ひますが、それに對する答を用意して置いて、何んな質問にあつても困らないやうに委しく書きしるして頂きたうございます。

と御願ひしたのに對する御返事の一節であります。

その前のところは

「まだ念佛の法門を委しく聞いて居られないから御註文も無理はないと思ふが、然し若し問はれても『上洛の時に承つただけで法門の委しいことは存じません。生死をはなるゝ道はあまたあるが在家の者などには往生淨土の道が一番よろしく、その爲に念佛するのでありますと教へられたまゝにさう信じて念佛して居るのであります。色々書物もあるさうでございますが、文字を知らぬものにはたゞその心をきいて念佛するばかりであります」と、答へられるだけでよろしいと思ひます。色々とな難問の答を書いて上げてでもそれでは却つてこしらへぐとなつてよくないと思ひます。ただ自分の信するまゝをその時に従つて御返答なさるがよろしいでせう」とあつてその次に津戸三郎自身の信を一層固めさせる意味

で、この法語が示されたのであります。

一寸見ると、個人主義に聞える「人をば知らず御身に限りては覺召すべし」などと言つて居りますから、少し變におもはれ易いのですが、津戸三郎に取つては眞剣な氣持で心配し切つて居る際であります。萬一にも津戸自身に二の足を踏むやうなおくれがあつてはなりませんし、またなまじ付焼刃の「教へて欲しい」などと云ふ氣持をおこしただけに、もつと強い心と眞正直な心とを要するとおぼし召されて、このやうなお言葉があつたものと推察されます。

さればこの法語の次には

『わざと逢々と人(を)あげさせ給ひて候こそ、かへすく(も)下人(に)も不便に候へ。なをく(幕府に)

召し問はれ候はん時にはこれ(京のこと)より百千(言)申して候はんことは時にもかない候まじければ、無益のことにて候。(されば自身に)はからひてよきやうに早晩に従ひて申させ給はんに、よも、ひがごとは候はじ。眞字假名に廣く書いて參らせ候はんは、以ての外に廣く文を作り候はんずることにて候へば、にはかにすべきことにて候はず。それはまた中々に悪しきことにて候ひぬべし。唯だ最も仔細は知り候はず、これほどに聞き

て申し候也と、申させ給ひ候はんに、心候はん人はさりとも心得候ひなん。又道心なからん人は如何に道理(を)百千萬(言)わかつとも、よも心得候はじ。殿(右幕下)は道理深くしてひが事おはしまさぬことにて候と、申し合ひて候へば、これらほどにきこし召さんに、念佛(は)ひが事にてありけり。今はな申しそと仰せらるることはよも候はじ。さらざらん(さうでない)人は如何に申すとも(また)思ふとも(理解が出来ないから)無益のことにてこそ候はんすれ。何事も御文にはつくしがた

く候。あなかしこく

とあります。問題の中心は鎌倉幕府からの念佛に就いての

椎尾辨匡・中村辨康序 林 靈 法著

# 新刊 法然上人を憶ふ (本會で取次ぐ)

B 6 版四四〇頁 實費三圓(送料共)

著者は思想上に懷疑懊惱を續け、遂に凡人報土に救はれた體験を通し、告白と懺悔の内に法然上人の教義をつとめた。

申込所 法然上人鑽仰會

東京市芝區芝公園明照會館  
振替東京八二一八七番

質問に、確信を以て己が信するところを答へればよいのであつて、たとひ幕府の諒解を得ずして「念佛停止」と云ふやうな事になつたとしても、それは自分の信仰をおびやかすさまたげにはならないことを示されたものであります。この念佛の信仰は日本の國家に取つて決してさまたげとなるものではありません。この確信あるが故に、法然上人も堂々たる御主張をなさつたのであります。されば二祖鎮西上人も

弟子辨阿彌陀佛は故法然上人よりかくの如く種々に念佛の法門を受け傳へて候なり。日本國の一切の人人を助け奉らんが爲に、年七旬に成りて最後の化導と存じてわななく／＼註し置き候なり

と「念佛三心要集」に告白して居られますが、このやうに何處までも國家中心でありますが、それ故にこそ「日本國の一切の人人を助け奉らん」と、淨土の信を勧められたのでありますから決して個人主義的なものではありません。或は「共生極樂」と云ひ、或は「願共諸衆生往生安樂國」と申してありますやうに、衆生と共にあつて獨生ではないのであります。一般に昔はよく往相廻向を自分の往生とし還相廻向を他の諸衆生の往生として區別しやうとす

るものもありましたが、それはその人の錯覺でありまして往相は「自他共生」であり還相は「度衆生」でありますから何處までも社會性を離れては居ないのであります。まして淨土は國家の理想體でありますから、その理想獲得を要望する淨土の信が非國家性非社會性であるべき筈ではありません。

たゞその往生の條件が「至誠」であるか無いか、言ひかへれば至誠を表はす南無が入國の條件として規定されて居ることが問題になればなるのでありますけれども、それは心で思つて居るかぎり口からだかに現はれるにきまつて居るものですから、からだよりもつと端的に現はし得る「聲」を標準にしたまでのものでありますし、また言葉を異にして居る諸民族の凡べてに通ずる宗教的表現として共通して居るものでありますし、更にはその簡單な言葉の中に千萬無量の意味が含まれる點に於いて誠に絶對と云つてもよいほどのものでありますから、それだけでも採用される價值があるのであります。しかもその本願たる所以が天地自然の理法としてさうあらねばならなかつたからであります。このことはまたいつかの機會に申し上げたいと思つて居ります。

## 編輯後記

◇ どんより曇つた六月五日、沿道に立ちならぶ幾萬の人々に見送られ故元帥をのせた喪車(海軍砲車)が肅々と芝水交社から日比谷葬場に進んで行きました。軍樂隊の奏する「命をすてゝ」の曲、儀仗隊の歩み、砲車のきしりを聞きながら米英撃滅の誓ひを更に新にしました。

◇ アツツ島の山崎部長以下二千有餘の精神は一億國民の心の中に生きて更に敵撃滅に邁進してゐます。重傷者は自決し、これを乗り越えて突撃に進んだ勇士達の心情を思ふと唯鬼神も哭くと云ふより他云ふべき言葉を知りません。

◇ 中村辨康先生が増上寺の執事長になられてから同寺が淨土宗の鍊成道場として清々面目を改めつつありますが、十八日には淨土宗東京教區教務所、日本女子會館及び

本會の共同主催で中村師を迎えての會を開催いたします。當日は里見達雄、村上秀子、吉田絃二郎三先生のお話があり、終つて信仰座談會を開く豫定です。

◇ 又この日には珍しくも眞野正順先生や佐藤賢順主事も出席されることになつてゐます。

◇ 眞野先生はもうすつかり快くなられ、隨筆集「芝園雜草」も殆んど脱稿の域にあり、本會から公刊される日も遠くはありません。

◇ 本會創立當時に編輯部の一員として活躍された井原文雄氏はこの程中支方面から戦地やけの元氣な顔をして無事歸還されました。

◇ 吉田絃二郎先生は相變らず御元氣で活躍されてゐます。

◇ 岡本一平先生から畫と文を頂きました。とし子を授かる」は三、四回連載される筈です。どうも私は遅筆なので……といひながら玄關に出てこられた先生の左手に

は反古の原稿用紙が一握りには出来ぬほどありました。

◇ 生田花世先生は關西の旅行から歸られて旅裝を解く暇もなく「最近の感動」を下さしまして、深謝いたします。

◇ 白鳥吾先生から詩一篇を頂きました。御禮を申すと共に今後とも御指導の程願ひ上げます。

◇ 「歩行と登山」の出口林次郎「療養所の法縁」の西村辰藏兩先生はともに本會々員であります。何れも本誌に相應しい玉稿であります。

◇ 用紙の不足を内容の充實で補ふべく努力してゐます。先月號から扉畫を廢し、獨立頁の廣告をやめました。

◇ また好評を博してゐた歌壇、俳壇も半頁づゝに致しました。これも全く止むを得ないことで何卒御容寛の程願ひ上げます。

◇ 本會出版部では「日常勤行式」を目下製版中であり「淨土宗讀本」再版を計畫中であります。(村瀬)

淨土 七月號

昭和十年五月二十日  
第三種郵便物認可  
昭和六年六月二日印刷納本  
昭和六年七月一日發行

(定價十二錢)

東京市芝區芝公園十五號明照會館  
編輯兼 眞野正順

東京市芝區芝公園十五號明照會館  
印刷人 赤尾光雄

東京市牛込區神保町七(東京一)  
印刷所 大日本印刷株式會社

配給元  
東京市神田區淡路町二ノ九  
日本出版配給株式會社

發行所 法然上人靈仰會  
東京市芝區芝公園明照會館内  
振替 東京八二二八七番

「淨土」購讀規定

一部定價 金十二錢

(送料一錢)

會費 金一圓五十錢  
一ヶ年 (送料共)

昭和十年七月廿日第三種郵便物認可 (毎月一回一日發行)  
 昭和十八年六月廿日印刷納本・昭和十八年七月一日發行

# 強腦強精に光明丸



腦病全身神經  
 系諸病腦溢血  
 鼻耳小心恐怖  
 腦毒症神經痛

光明丸は腦疾病、神經系統の疼痛や硬直痙攣、動脈硬化、高血壓を治療し、神經を鎮め、腦毒や全身の病毒、鬱血等を除去し、血行を整へ、全身を賦活し、種々の不快苦痛なる症狀を取去り、眞の安眠に導き、強腦強壯ならしめ、頭腦力、記憶力、思考力を増強せしめ、心身共に健全明快に導く、即ち根本原理に即した合理的優秀薬であります。

有名藥店、百貨店、  
 店二有出品切ノ  
 節ハ直接本舖へ  
 注文乞フ

藥價  
 阿德三廿十六  
 用日日日日  
 十五  
 十五

(本舖) 京都伏見いなり山 願成閣  
 (代理店) 全國一流賣藥卸賣會社

試供薬と  
 説明書を  
 進皇

主治  
 腦病、神經病、腦神經衰弱、不眠症、ヒステリー、てんかん、ヒキツケ、小兒麻痺、腦膜炎、腦毒症、腦溢血、高血壓、半身不隨、心悸亢進、耳鳴、逆上、頭痛、頭重、肩首コリ、(性の)鼻病、耳病、多夢惡夢、頭腦力、記憶力、思考力減退、健忘症、小心恐怖症、恐迫觀念、憂鬱症、取越苦勞、雜念妄想、胃腸障害。

淨土

第九卷 第七號

定價金十二錢(送料)  
 滿鮮等金十三錢  
 外地定價